

下河辺淳アーカイヴス
Archives Report

下河辺淳の
地方へのまなざし

Vol.12

はじめに

～下河辺淳アーカイヴス レポートについて～

一般財団法人日本開発構想研究所は、2008〔平成 20〕年 1 月に「下河辺淳アーカイヴス」を開設いたしました。このアーカイヴスは、下河辺淳氏の約 60 年にわたる諸活動の記録であるとともに、日本における戦後史の一端を垣間見ることができる貴重な資料群でもあります。また下河辺氏が別途保管していた戦後の国土計画に関連する資料群については、2013〔平成 25〕年 6 月に、新たに「戦後国土計画関連資料アーカイヴス」として開設いたしました。

“時代のプランナー”とも称された下河辺氏のこうした資料について、多くの皆様にご活用いただき、さらにこのアーカイヴスを充実させるために、2009〔平成 21〕年よりアーカイヴスレポートを発刊しています。

アーカイヴスレポートでは、これらの資料群から毎号タイムリーなテーマを設定し、テーマに沿った特徴的な下河辺氏の著作物を「Key Information」で取り上げるとともに、関連資料を「Reference Data Clipping」として一覧に取りまとめています。いずれも「下河辺淳アーカイヴス」のホームページから、その書誌情報をご覧いただくことが可能です。

本号は、「下河辺淳の地方へのまなざし～虫の目・鳥の目・魚の目・」をテーマに、元掛川市長の榛村純一氏、早川町長の辻一幸氏、当研究所代表理事の戸沼幸市による鼎談を企画し、その記録を取りまとめました。

また、「Archives News」では、アーカイヴスレポート Vol.10 で取り上げた、「下河辺淳 沖縄関係資料」の沖縄県公文書館への寄贈について報告します。

本レポートを、皆様の研究活動等の一助としてご活用いただければ幸いです。

2016〔平成 28〕年 6 月

一般財団法人日本開発構想研究所
「下河辺淳アーカイヴス」

一般財団法人日本開発構想研究所は、くにづくりから、まちづくり、ひとづくりまで、活力に満ちた明日の社会の形成に役立つ学際的な研究調査を、人と人とのふれ合いを大切に、地道に進めるために 1972〔昭和 47〕年 7 月に設立された研究機関です。

そのため、多彩な研究者からなる内部スタッフを擁し、必要に応じて外部専門家の協力を得つつ総合的かつ実践的な研究を行うシンクタンクとしての歩みを進めています。

目 次

鼎談「下河辺淳の地方へのまなざし～虫の目、鳥の目、魚の目～」 ……3

榛村 純一 氏（公益財団法人日本茶業中央会会長、元掛川市長）

辻 一幸 氏（早川町長）

戸沼 幸市（一般財団法人日本開発構想研究所代表理事）

＜司会＞ 阿部 和彦（一般財団法人日本開発構想研究所業務執行理事）

Key Information ……17

小学生のみなさんがたへ～一〇〇〇年の不思議な力～

森とむらの会の15周年に想う

塩と焼鯖とお米のルート

地方社会の現代的発見

Reference Data Clipping ……31

Archives News ……40

—「下河辺淳 沖縄関係資料」を沖縄県公文書館に寄贈しました—

下河辺淳アーカイヴスについて ……45

<鼎談>

「下河辺淳の地方へのまなざし

～虫の目・鳥の目・魚の目～

榛村 純一 氏（公益財団法人日本茶業中央会会長、元掛川市長）

辻 一幸 氏（早川町長）

戸沼 幸市（一般財団法人日本開発構想研究所代表理事）

<司会> 阿部 和彦（一般財団法人日本開発構想研究所業務執行理事）



定住圏構想と掛川市

阿部：2008〔平成20〕年1月に、日本開発構想研究所（以下、開構研）で「下河辺淳アーカイヴス」を開設し、9年ほどが経ちました。今回は「地方」をテーマにしましたが、下河辺さんは、“鳥の目”で全体を鳥瞰しながら、地域でいろいろ活動している人たちと一緒に、“虫の目”で見て細かいところもこだわりながら活動されてきたと思います。今回は、元掛川市長の榛村純一さんと早川町長の辻一幸さんをお招きして、下河辺さんが地方の人たちとどういうふうにかかわっていたか、その辺を中心にお話をいただけたらと考えています。

榛村さんが掛川市長になられたのは、1977〔昭和52〕年の三全総の閣議決定のころでしたね。その後、下河辺さん、大蔵省事務次官や国鉄総裁を歴任された高木文雄さんらと一緒に「森とむらの会」を設立されました。下河辺さんとどんなふうにかかわりながら過ごされたか、自己紹介も含めてお話をよろしくお願ひいたします。

榛村：私が下河辺さんに最初にお目にかかったのは、1968〔昭和43〕～1969〔昭和44〕年の新全総のころだったと思います。初めて予算をもらって仕事をしたのは、1969〔昭和49〕年に静岡県佐久間町でやった「山村シンポジウム」です。これを皮切りに全国で山村の過疎問題をやりましたが、それ以降林業問題や過疎問題は、下河辺さんにとってはいつも棘の刺さった

ような話だったと思います。

次に新全総の反省もあって、森林問題や環境問題をテーマに、「定住圏構想」を柱とした三全総が閣議決定されました。1977 [昭和 42] 年 12 月で、私はその年の 9 月に掛川市長に当選しました。「森林の研究をいろいろ一緒にやろうと思っていたのに、市長になんかなっちゃ困るじゃないか」と下河辺さんに言われたことを覚えています (笑)。

それから 2 年経って、私は下河辺さんに「本当に地方の問題を掘り下げてやっていただくなら、どなたか助役を派遣してくれませんか」と言ったら、下河辺さんが「地方都市のことをわかる人材を育てよう」ということで、その当時、国土庁で地方都市整備課長をやっていた桑島潔さんを助役に派遣してくれました。下河辺さんは「掛川で存分に地方都市の勉強をさせてくれ」と言っていましたね。その情報収集と現場踏査で定住圏構想のいろいろな話がどんどん発展しました。



榎村純一氏

その後、「地方は自立しなければだめだ」という分散の論理が出てきて、「生涯学習」ということが盛んに言われるようになりました。職を求めて東京に行くのではなくて、山村に定住して暮らすことを生涯のテーマにする人を育てていかなければいかんと。下河辺さんは総合研究開発機構 (以下 NIRA) の理事長になって、のちに東大総長や文部大臣を歴任された有馬朗人さんを座長にして、生涯学習をテーマにした研究会を何回もやりました。掛川市でも「生涯学習」をまちづくりの都市宣言に据えていたので、大きな全国シンポジウムをやり、「社会を変える教育、未来を創る教育」という報告書にまとめました。

最初のおつき合いは森林問題からですが、生涯教育、地方都市、まちづくり、定住といったテーマを全部ミックスして、いろいろご指導していただいたり、文句を言わせてもらったりしてきました。

「森とむらの会」はまた別のルートで、都市の人々が森林について理解し、「森を文化的に語る」グループをつくりたいということで、井上靖先生や東山魁夷先生らをメンバーにして文化人の会にしました。ところが、高木さんが「森林も大事だけれど、むらがつぶれたら森林はだめになるから、むらも入れよう」と言って、森の代表が下河辺さん、むらの代表が高木さんということで、「森とむらの会」が生まれました。これがやがて、下河辺さんの「森林化社会」という言葉につながっていったと思います。

上流文化圏構想と早川町

阿部：辻さんは 40 年近く町長として町を引っ張ってこられましたね、下河辺さんとの出会いもあって上流文化圏研究所などを設立されましたね。

辻：下河辺さんは雲の上の人のような存在でしたが、お近づきになれたことは大変ありがたいことでした。山梨県庁の林務担当者たちが仕事以外の集まりで地域おこしのグループをつくっていて、彼らが講演で下河辺さんをお招きしたのが最初の出会いで、1991 [平成 3] ~1992 [平成 4] 年ごろだと記憶しています。当時は四全総が始まっていたころで、先生の業績は十分知

っていましたので、大変な人を山梨県に呼んできたなという印象でした。

全国的に地方における「まちづくり計画」は 1970 [昭和 45] 年ごろからスタートしたと思いますが、早川町では 1980 [昭和 55] 年に第二次総合計画が策定されて、それを受け継いで私が町長に就任しました。しかし 1982 [昭和 57] 年の台風 10 号の影響で、町は壊滅的な被害を受けて、被害総額も百数十億円という大規模なものになりました。

第二次総合計画をつくって 1 年あまりで台風に遭遇しましたから、結局計画は見直しせざるを得なくなりました。1984 [昭和 59] 年に第三次総合計画をスタートさせたのですが、「絵に描いた餅ではだめだ。この計画にのっとって町をつくっていくにはどうすればいいか」ということを考えながら、第四次の総合計画づくりに着手しました。いろいろな方々のお知恵をお借りして、1994 [平成 6] 年に「早川 22 世紀計画—日本上流文化圏構想」を策定しました。

当時、時代の流れが速すぎて、いまの山村の現状ではとても追いついていけない。山村はいかにあるべきか、その中でどういう暮らしをしていったらいいかということが、長期計画をつくるうえでのテーマでした。世の中は瞬間・時間で動いているけれども、山村はもう少し緩やかに動いてもいいのではないか。その中で、本物の生き方を見つけられるのではないかと考えました。そこで、タイトルも一世紀先にして、上流か源流かという話もでしたが、「源流には違いないが上流でいこう。日本列島の真ん中にある町だから、日本もつけよう」ということになりました。



辻一幸氏

これに下河辺さんが非常に関心を持ってくださいました。そして、早稲田大学の後藤春彦先生や山梨県の職員だった鈴木輝隆さんなどと一緒に、下河辺さんを囲んで「地域から国を考える」というシンポジウムを行いました。1996 [平成 8] 年の夏には、早川町で「もうひとつのくにづくり—フォッサマグナ¹の叫び」というシンポジウムを開催して、全国から参加者が集まりました。第四次総合計画の中では、「上流文化圏研究所をつくる」とはっきりうたっていて、下河辺さんをお願いして初代の理事長に就任していただきました。当時は役場の中の任意の組織でしたが、NPO の法改正ができたときに法人化して現在に至っています。下河辺さんにお目にかかるたびに、「早く町長を辞めて、研究所の理事長をやりなさい」と言われていました。

時代の流れが激しい中で、陰と陽、日の当たる部分と当たらない部分の差が増していく。下河辺さんは国土のバランスを考えながら、山村の問題はもちろん、今日的な東京一極集中と地方の課題を心配されていたと思います。

阿部：早川町にはいろいろな課題があると思いますが、いま国との関係をどんなふう感じていらっしゃいますか。

辻：現在は五全総の後で、2050 年くらいまでの計画が打ち出されていますが、地方創生の問題が出てきています。下河辺さんは全総に取り組みされてきた中で、21 世紀の日本の姿やその先の

¹ フォッサマグナ (Fossa Magna=大きな溝) は、およそ 1500 万年前に日本海の拡大に伴って形成された凹地で、西側の境界の糸魚川—静岡構造線は、新潟県糸魚川市から長野県大町市、松本市、山梨県富士見町、白州町、早川町を経て、静岡市に達している。

(「文化遺産オンライン」<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/207133>)

国土のあり方を心配されていましたが、全総とも違う方向に進んでいる。これからの国づくりについて、国と地方がどういう関係の中で組み立てていったらいいかということを感じます。東京の一極集中は進み、人口減少は進み、地方は疲弊して、かつ国際問題などが複雑に絡み合っている中で、国のあり方をどのように組み立てていけばよいのか。下河辺さんも心を痛めているのではないかと思います。

戦後の国土計画と下河辺さん

阿部：戸沼さんと下河辺さんとのお付き合いはどのようなものだったのでしょうか。



戸沼幸市

戸沼：1968 [昭和 43] 年に、当時の佐藤栄作内閣が主催して明治百年を記念する『21 世紀の日本』の姿、形を求めるコンペティションがありました。東大、京大、早稲田なども参加して、10 チームくらい選ばれて、3 年間、皆一生懸命やったわけです。ちょうど新全総のころで、公害問題があり、学生紛争の真ただ中でどこの大学も大変な時期でした。そのときに早稲田大学の「アニマルから人間へ」「ピラミッドから網の目へ」が最優秀賞に選ばれました。私の師、吉阪隆正が早大の文系、理系の先生方を集めてグループを作って作業したものです。

下河辺さんは東大の建築学科出身だと思いますが、戦後の国土計画のはしりのときで、下河辺さんも吉阪さんたちも戦後復興に一生懸命だった。戦争という強烈な体験を持ちながら、焼け跡から復興する国づくりに情熱を傾ける気迫のようなものがありましたね。

早稲田は「日本海が表だ。太平洋メガロポリスに対して日本海国土軸の考え方でやろう」ということで、日本列島の日本地図を逆さまにして作業しました。東北に都を移すべしと「北上京遷都論」岩手の山にちょうど竜の形をした湖があるので、そこにしよう」と提案したんです。それで、東大丹下チームは「東京湾を埋め立てて、そこに展都する」という対極的なものでした。

私は早大案の実務を担当していたこともあり、首都機能移転や首都改造というテーマで国土庁から呼ばれて、初めて下河辺さんにお会いしました。1985 [昭和 60] 年のつくば万博のときにも声をかけられて、「21 世紀の日本の科学はどうあるべきか」、殊に「大都市問題、東京問題」をどうするかについていろいろと下河辺さん達と議論、検討したりしました。

その後、当研究所の理事長を引き受けて、ある日、虎ノ門の喫茶店で下河辺さんと偶然出会いました。その数日後、下河辺さんがひょっこり研究所に来て、「いままでの国土の膨大な資料について、NIRA に預けていたけれど、これを引き取ることになったので、開構研で面倒をみてくれないか」といわれて、所内で相談してお引き受けして「下河辺淳アーカイヴス」を開設することにしました。

改めて資料を見ると、やはり下河辺さんは戦後の国土計画のボスみたいな存在で、大きな役割を果たした歴史的な人物だと思います。「鳥の目、虫の目」という話がありましたが、「魚の

目」というのも入るのではないのでしょうか。時代の流れを読み、地域における切実な現場の見方もできて、国土計画に強烈な問題提起をしている。下河辺さんは休日もいろいろな県に出掛けて行って、企画部の連中などと激しく議論していたようです。

下河辺淳の地方へのまなざし



＜司会＞阿部和彦

阿部：「下河辺淳アーカイヴス」の中にも、早川町や上流文化圏についての資料が 50 点くらいあって、掛川市や「森とむらの会」の資料も同じくらいあります。下河辺さんは地域で活動している方々とも非常におもしろい会話をしているのですが、そのことと全総計画をつくることの間に関係があったのか。国の役人が地域にどうかかわったのかというところに興味があります。上流文化圏構想は下河辺さんが言いだしたことだと思っていたのですが、早川町で打ち出した計画に、下河辺さんが注目したというのはおもしろいと思いました。

辻：早川町は昭和の合併で 6 つの村が一緒になったのですが、自治のあり方として、「足もとへ返そう」ということを一つのテーマに入れました。「早川町の昭和の合併は間違っていた。しかし結果としてやむを得ない合併だった。地域づくりには旧村単位、コミュニティ単位が基本だ」ということもうたったわけですが、下河辺さんにはそこにも関心を持っていただきました。町長の任期うんぬんという話ではなくて、町長が変わっても地域の不変の考え方を長期計画に落とし込もうということでした。

戸沼：上流文化圏研究所が主体になって、「千年の学校」というシンポジウムをやられましたね。ニセコでもやっている。全国に飛び火して、それぞれにテーマ性があって、意味のあるプロジェクトだということを、下河辺さんのまなざしは感じていたのでしょうか。国土計画をやる人は、そのくらいの見識がなければやってはいけないのではないかと。そしてそれを実践するというのは、下河辺さんのロマンチズムもあるんじゃないかという気がしますね。

辻：1997 [平成 9] 年に宮崎の五ヶ瀬、1998 [平成 10] 年にニセコでやりました。もちろん下河辺さんも来てくれました。

榛村：下河辺さんは、縦割行政にはまらない人で、すべてを総合的に考える。優れている一方で、得体が知れないとも言えますね (笑)。官庁の序列を無視していろいろな人とつながっている。三全総までは下河辺さんの影響力は非常に強いですよね。四全総、五全総になるとだんだんと薄められて、広域市町村圏の後の流域圏、あるいは定住圏、圏域行政から広域連合、そして合併と、またもとの縦割官庁、総務省関係に戻ってしまった。華やかな総合性を持ったプランで、下河辺さんが影響力も発揮できたのは、新全総から三全総までだったと思います。その後は、縦割官庁がそれを否定したというか、ほめて言えば堅実になったというか…。

戸沼：逆に言えば、国土計画的な役割は既に終わったということでしょうね。今日のテーマは「下河辺淳の地方へのまなざしとその現代的な意義」といったことですが、三全総あたりである種の国土計画としての役割は終息して、いまは形成計画に代わりました。広域地域に全部問題を明け渡して俯瞰的に眺めていようという感じがします。現在の国土形成計画の成長期の日

本が反転して次のテーマに向かっています。

例えば、人口減少社会をどうするか。20世紀の初めごろは人口4000万人程度だったものが、現在は1億2000万人。江戸時代の寿命は40歳ぐらいで、農業人口は7割ほどでしたが、いまは寿命が80歳を超えて、農業人口は1割を切っている。2050年ごろには8000万人ぐらい、22世紀には5000万人という試算もあります。そういう国のありかたをどうイメージしていくのか。それから、いま国が考えている一極集中や地方創生をどういう考え方で、どういう筋書きで進めていくのか。一極集中で一番クローズアップされているのは、災害の問題でしょう。首都機能移転の議論の出発点は、「東京に災害が起きたら大変だ。日本壊滅だ」ということで、そのほかに原発問題があります。グローバル化という話題も非常に大きくて、人口が5000万人になるから、外国人を入れるのか入れないのか、観光客でカバーするのか、そのとき地方はどのような対応があり得るのか。「人間の幸福とは何か」ということが、現代的なテーマではないかという気がしています。

榛村：阪神・淡路大震災のときは復興委員長で表舞台に立っていましたが、沖縄の普天間基地返還合意のときは裏方でずいぶんいろいろなことをやっておられた。表に出て「下河辺あり」という立場でやる場合と、まったくの影武者になる場合がありますね。シンポジウムは多様な意見の交流で好きだったと思います。人を集めて侃々諤々と議論して、本物の考え方を市町村が持つようになればいい、ということだったのではないかと。竹下総理時代に「ふるさと創生1億円」という施策がありましたね。当初下河辺さんは、3億円と言ったんですが、自治省と大蔵省が反対して、1億円になった。下河辺さんは「そのくらい思い切ってやらなければいい案は出ない。地方に目を向けて考えさせるような効果的なものをやらないとだめだ」という思いでしたが、逆に考えれば「やってみろ」という市町村長に対する突き付けでもあるんですよ。早川町は1億円を何に使ったのですか。

辻：1982〔昭和57〕年の災害の後でしたから、災害復旧と防災連絡用の無線機を各戸に入れました。早川町はいまでも37の集落が点在しているんです。1956〔昭和31〕年の合併時は、電源開発と林業が盛んなときで、人口が1万人いました。水力発電所も14カ所もありましたし、町は非常に元気でした。しかし発電所の開発が終わって自動化・無人化になって全国から来ていた技術者とその家族も出て行って、林業も衰退してしまいました。現在は人口1200人ほどで、高齢化率も50%を超えています。1960〔昭和35〕年の国勢調査をピークに減り続け、私が1980〔昭和55〕年に町長に就任したときは3000人を割っていました。わずか20年ほどで7000人が出ていったわけで、すごいことです。

榛村：「ふるさと創生1億円」は、マスコミが「市町村は知恵が出ない」とか「アイデアを持っていない」という証明に使われましたね。下河辺さんの言葉で覚えているのは、「無為無策の市町村はだめだ。補助金を欲しがらただけで何の構想もない」ということです。掛川市では、アメリカに農場を買いましたが、マスコミの話題にはまったく上りませんでしたね。「一億円分の金塊は無駄だ。知恵の無い典型、バカバカしいバラマキ」といった話ばかりが拾われた。下河辺つぶしみみたいなもので、縦割行政の抵抗ですよ。

全総計画でうたわれたプラス面とマイナス面

戸沼：下河辺さんは、木の文化の話はずいぶんされていたと思います。建築出身ということもあると思いますが、木造建築は500年、1000年もつ、といった話もされていました。

榛村：木に対する評価はされていましたね。日本で最初に木造で天守閣の復元をやったのは遠州掛川城ですが、下河辺さんもわざわざ見に来ましたよ。

戸沼：いまの建物は耐用年限が100年とか、むしろ古くなると価値が下がるけれど、逆に本物の木の文化が持っている建築は、それとともに貫禄が出るといった話は何度か聞きましたが、まったくそのとおりだと思いますね。

辻：振り返ってみますと、全総の中では必ずプラス面とマイナス面がうたわれていますよね。それがそのとおりになって国が動いているなということの後になってわかるわけですが、あのときに指摘していること、マイナス部分というか日陰の部分で指摘されていることも、いま現実には起きているなど。全総計画の過程で下河辺さんが心配をしてきたことが、当たっているなと感じます。繁栄する一極集中の姿と、疲弊していく地方の姿も両方を見据えたうえで、下河辺さんは多くの人たちに接してこられたのではないのでしょうか。上流文化圏研究所のシンポジウムでは、お体の調子悪くても、夜を徹して話に付き合ってくれました。しかし残念なことに、首長が変わられると付き合いも途切れてしまうようなところがあって、ちょっと憂いますね。

戸沼：私は大学で学生を教える立場でもありますが、国の話は議論としてはするけれど、直接その場所に行って学生と一緒に何かやる、そこから日本を見るというかたちです。まず現場を知らなければ仕事はできません。国土政策ともなれば、全国各地からいろいろな情報を集めたり、現場に行って地元と一緒に話し合ったりする場が必要だと思います。いまの役人はそういうことをあまりやらない気がしますし、だから絵に描いた餅のような、誰が責任をとるのかもはっきりしない計画が多くなったように思います。

辻：その辺は物足りないですね。心がないし、だんだんと大事な部分がそがれているように思います。視察に来ていただいても、食事なども自腹で別々に食べる、という世の中ですから、ざっくばらんな打ち解けた話もなかなかできません。「これからの時代、取り戻さなければならないことは、人間性とか真の豊かさだ」とかと言っているながら、そういうものを削いでいるのが、お役所仕事のような感じがしますね。

シンクタンクの役割—NIRA 時代の下河辺さん

榛村：下河辺さんは国土事務次官を辞められた後、NIRAの理事長に就任されましたが、そのときは中国問題、森林問題、生涯教育、そのほかに5つくらいの終生のテーマがあったようでした。かつて日本の三百諸侯がいたように「300市町村長を育てなければならない」とか、「どこにも偏らないことを言う研究提言団体をひとつづらいつくらなければならない」と言われていて、世界のシンクタンクとの交流もずいぶんやっておられましたね。

戸沼：そうですね。NIRAでの仕事も含め、日本でシンクタンクを真剣に育てよう、アメリカにあるような力のあるシンクタンクをつくりたいという気持ちがありましたね。開構研も、で

できれば少しグローバルなシンクタンクをやってみたいのですが、なかなか難しいところがあります。

榛村：下河辺さんが NIRA 理事長を務めたころは金利が良かったから、年間予算も潤沢だったし、シンクタンクとして飯を食うために発注者におもねるようなことをやらなくても、自前でできた。全盛期でしたね。

戸沼：そうですね。NPO の役割をどう考えるかも議論が必要ですね。上流文化圏研究所はいかがですか。

辻：下河辺さんに理事長を引き受けていただいたときは役場の任意の組織の中でスタートして、法律ができてすぐに NPO に切り替えました。NPO でも公益法人であってもいいのですが、自主自立する組織にしたいと考えていました。NPO の人格がありますから、町とは一線を引ながら、町の行政と車の両輪のようなかたちでやってきました。この先誰が町長になるかわかりませんが、研究所はなんとか持続していきたいですね。

初めは、町民にも理解を得られなくて、アンケートをとっても「要らない」という意見が多かったのですが、いまは大学生が自由に出入りしたり、地域おこしの活動もやっていて、だいぶ認知されてきたと思います。地方創生の人口ビジョンの策定も、町と一緒に中心となってやりました。上流文化圏構想を基本にしながら、地域を自立させたいと思っています。

戸沼：まさに早川町のシンクタンクですね。それがネットワークとしても効いているということですね。

阿部：町としては、いまの段階で NPO に対してどの程度の補助をされているのでしょうか。

辻：事業予算を含めて 3000~4000 万円ですね。

阿部：それは大したものですね。

国土、森とむら、そして林業を考える

戸沼：人間のある種のよりどころとして、海や森林、八百万の神ではありませんが、神社仏閣などがありますね。氏神とか山の神とか、宗教と上流文化圏の宗教と上流文化圏は関係しますかね。祭りなどはあるのでしょうか。

辻：地域の伝統的な祭りは残していかなければなりません、集落が高齢化していますので、先細りしていますね。

榛村：下河辺さんは、林業については国有林労務以外言われませんでしたね。難しいと思われたのではないのでしょうか。ただ、森林は非常に大事に考えておられました。森林は地方にあるものだけれど、地方へのまなざしではなくて、東京を見る目と同じです。日本列島全体から見

NPO法人日本上流文化圏研究所

山の暮らしを守る」をキーワードに、山梨県早川町の活性化と河川上流域の未来を考へ行動する中間支援組織です。

ホーム | 上流域とは | 活動内容 | 各種ご支援 | 旅行物 | 会員登録 | リンク集

【お知らせ】
弊社では現在、**そば製アルプス運営スタッフを募集**しております。
お申し込みは「そば製アルプス ホームページ」をご覧ください。

会員登録中！

上流域研究サイト

公益NPO「ほろかわ日記」
上流域Facebookページ
早川フィールドミュージアム
移住サイト「山で暮らそう」
道の駅緑陰サマーキャンプ
はやかわおんいであらびム
2000人のホームページ
早川町の交通地図
早川川歴史館

いのちの水から風土と暮らしを学び
地域と国を考え実践する機関

山から海へ、野へ、そして海へ、再び山となって山へ。この水の循環を基盤として人間の生活圏を
考え、なによりも大切な考えるのが水系主義だと書かれています。世界のどの国でもこの地域で
も、この水系を基本として成り立ってきました。日本も例外ではありません。
近代以降の経済圏上、効率至上の考え方はこの水系を切断し、本来生き物のすべてがよって立つ
環境を壊れてきました。
時代は大きく回帰を始めている。この失われた水系への視点から、その源である上流域
に光を当て、赤土、汗を流し、人々と語り合い、共感を得ること、そして新たに本物の価値、価値
的価値を創出していくこと、これが私たちの研究の理念であり目標です。
この研究のさまざまな活動の成果が、なら、全国的に上流域に生活圏を築く人々の共感を呼び、地
域を越えて連携を促すこと、さらに20世紀前後の遺産として、新しい世紀を切り開く(思想と行動の)の
どの機関になることを願っています。

NPO 法人日本上流文化研究所
<http://www.joryuken.net/concrete5/>

ても、森林の問題は大都市の問題でもあるという見方だったと思います。

戸沼：いま東京でもいろいろな計画の中で、例えば東京・新宿区の都市マスタープランの7つの森とか、まず緑から入っていきますね。東京といえども、森林という人間よりも寿命の長いものをベースにしながらまちづくりを考えざるを得ないのだと思います。

阿部：話は戻りますが、「森とむらの会」は財団でつくられたんですよね。

榛村：そうです。一人100万円です。下河辺さんも高木さんも、本人が100万円ずつ出されました。

阿部：有識者のサロンのような感じが強かったようですが、提言もずいぶんと出されています。

榛村：40本以上出しましたよ。そのときに千年の森や上流文化圏の話も入っていました。

阿部：林業の衰退は長く問題になっていますが、最近専門家にうかがったところ、国産材も含めて製材の部分は非常に活況を呈していて、逆に森林側がなかなか対応できない。下流域の国産材や製材を使うことはブームになっているそうです。それに対して、供給する森林側がなかなか対応できないというお話でした。

榛村：下河辺さんは、森林については本当に理解が深かったですね。例えば、鎌倉時代に禅を日本に持ってきた栄西禅師は、中国で寺を建てるときに日本から材木を運びました。鎌倉時代は木材を輸出していたんですね。「千年の森」という言葉は下河辺さんが考えたのかどうかわかりませんが、独特の感性を持っていましたね。はやりませんでした。「森林化社会」という言葉もつくりましたし。しかし難しかったというか、イメージしにくくてやや抽象的な考え方としてとらえられてしまいましたね。

戸沼：生涯学習都市は、榛村さんのご発案でしょうけれども、非常に大きなテーマですね。早稲田大学でも日本の若者世代が減って、留学生が5000人、社会人学習プログラムへの参加人数が3万人という状況ですから、大学もずいぶん様変わりしています。学習と言わなくても、高齢者が学ぶ機会というのはどこの地域でも必要でしょうし、「千年の学校」も続けてほしいですね。

榛村：現場の市町村長は、森林問題や地方都市問題における一番の精通者、エキスパートでなければなりません。そのためにも自分で生涯教育をやらなければいけない、という真意だったと思います。NIRAの研究補助金でシンポジウムやプロジェクトを何回もやりましたし、報告書も出しています。

戸沼：地方の大学が拠点になればいいと思いますが、なかなか一生懸命にはやらないようですね。生涯学習問題は時代的なテーマではないでしょうか。ちょっと話がそれますが、人間は、山の好きな人と海の好きな人と2つに分かれるそうですが、下河辺さんはどちらでしょうか。

榛村：山ですかね。

阿部：五全総のときは、日本列島の5つの国土軸²に加えて、尖閣列島、沖縄、沖の鳥島、硫黄島、南鳥島等や北の礼文島から国後、択捉島も含めて、外洋諸島の国土軸みたいなものを一生懸命描いていましたね。

榛村：下河辺さんは、湾のあり方について非常に研究していましたね。そこに大都市も発達しましたから。

² 5つの国土軸とは、西日本国土軸、東日本国土軸、日本海国土軸、太平洋新国土軸、東アジア国土軸。

阿部：東海道新幹線をつくる時も、海側のルートにするか・山側のルートにするかは結構議論があったようですね。当時は山側も人口や経済力が強くて、拮抗していたけれども、結局は海側のルートを通すことになって、海側が非常に発展しました。掛川市に新幹線の駅をつくるということで、「ストップ・ザ・新幹線」という話もありました。下河辺さんや高木さんもかわりがあったのでしょうか。

榛村：下河辺さんは三全総のときに、まずモデル定住圏をつくろうと構想していました。300の広域市町村圏みたいなものを定住圏として設定して、手始めにモデル定住圏を10カ所つくるということで、掛川市も指定されました。教育、文化、医療、福祉、安全、レクリエーション、雇用という7項目について、高次都市が持っている機能を定住圏の300に与える手法を検討する。私はそれを逆手にとって、掛川市が高次都市機能を持つためにも「ただ通っているだけで何の役にも立たないから、新幹線の駅をつくってくれ」と言ったわけです。一方で、1933〔昭和8〕年に建設され、1980〔昭和15〕年に改築された木造の掛川駅の木造駅舎も保存しています。昨年耐震化工事も完了して、今年1月に供用開始になりました。



掛川駅木造駅舎（左：昭和15年改築当時、右：平成24年）
掛川市ホームページより

<http://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/city/kihu/ekisya/ekisyahozonkatudou.html>

阿部：新幹線の駅ができたことは掛川市にとっては大きかったですね。早川町の林業はどういう状況なのでしょう。

辻：早川町は96%が森林ですが、林業では食べていけないような状況で、生業にはなりません。何とか森林組合だけは残っています。山梨県はかつては60カ所くらい森林組合がありましたが、いまは12ほどです。国指導による森林組合の合併はしませんでしたから、国の補助が無くなってしまいました。地元で組合を残さなければ山村の存在も無くなるということで、町で面倒を見るという決意で単独で残しました。林業では食べていきません。高齢化していますから、全体としては後退です。ただ、先ほど木材需要の話がありましたが、国産材利用が30%まで回復したということでこれは良い傾向だと思います。

課題・問題は山村にもあります。これをどうしていくのか。国産材利用を50%まで回復するというのが目標ですが、供給地に課題が山積しています。林業従事者、専門者は地方からいなくなっています。特に民有林などは自分の山の境がわからないといった荒廃林地や不在地主の問題もあります。大変な努力をしていかなければならないですね。こうしたことを国でどう考

えていくのだろうと思いながら、われわれは単独で、町の予算を投入しながら、森林組合を動かして、少しずつですが個人林の林地整備もしています。

榛村: 自給率が30%まで戻って来たというのは、林野庁のごまかしの面があります。要するに、CLT (Cross-Laminated Timber³) の需要があるということで、無垢の木を育ててきた山村の人たちはお金にならないんです。従来の林業型でやってきた人は、国・県・市町村の補助金で間伐奨励費が出ているから何とかやっている、という状態です。

阿部: 下河辺さんの話に戻すと、環境保全のための森林に対する関心は結構あったように思うのですが、林業をどうするかについてはあまりいい回答を持っていたとは思えないですね。

榛村: 私自身は自分が若いときから木を植えていましたから、そろそろ左うちわで暮らせる段階になると思っていたら、木材の値段が暴落して、こんなに予定が外れた産業はないと嘆いたことがあるんですよ。そうしたら、下河辺さんに「それでいいんだよ」と言われました。冷たいなあと思ったのですが、「農地改革を免れた林業家がしつかりしないからそうなんだ。田んぼの地主は農地改革を徹底して良くなったんだから、山持ちも材木の値段が下がって林業が不振になったのなら、森林組合を強化するとか、考えなければいけない。それができないような勢力は引退しなきゃだめだよ」と言っていましたね。

とにかく霞が関官僚としては、東大法学部以外で、これだけ発言力と影響力を持った人はいないと思います。それは、やはり下河辺さんは幅広く奥深かったということだけけれども、もう少し客観的に言えば、日本が焼け野原から立ち上がる時は従来の縦割り行政もつぶれていたという背景もあるのかもしれませんが。国土というものをどうするかと論じていた新全総、三全総のとき、三百諸侯にあわせて定住圏をつくろうと言っていたころが国土庁と下河辺さんの最盛期だったと思いますね。

戸沼: あれが国土計画の原論ではないでしょうか。

榛村: 原論だと思います。それを自治省と大蔵省はやめさせたんですよ。中央集権の縦割行政がつぶれちゃうから。

戸沼: 国土形成計画はどういうふうにご覧になりますか。

榛村: ごまかしのような気もしますね。全総の流れを断ち切るために「国土形成計画」という言葉にしたと思います。

阿部: 「森とむらの会」の話がありましたが、会の活動についてももう少し詳しくご紹介いただけますか。

榛村: もともと国有林は、農林省山林局が所管する旧内地国有林、宮内庁皇室林野局の御料林、内務省北海道庁所管の北海道国有林に分かれていましたが、戦後の「林政統一」で農林省山林局（林野庁）が一元的に管理するようになりました。森林問題というのは、国土計画の基礎にある大事な問題ではありますが、難しい、あるいは抽象的な存在になりやすいので、なかなか論じられない。

山村の町村長は道路やトンネル、橋を整備してくれということで、田中角栄は上越国境を3本もトンネルでぶち抜きました。そういう流れで、市町村長の陳情型、予算分捕り型、公共投

³ 1995年ごろからオーストリアを中心として発展してきた新しい木質構造用材料。ひき板を並べた層を、板の方向が層ごとに直行するように重ねて接着した大判のパネルを示す用語（一般社団法人日本 CLT 協会ホームページより）

資配分型の要求に対して、そうではなくて森林地帯というものを文化的にとらえて、都市の人たちが自分たちの生活にとってどういう役割を担っているかということを考え、「森林を大事にしよう」「森林を育てていこう」という声を大きくしていかなければいけない。下河辺さんは、ずっと全総計画に携わってこられて、「良い国づくりとは、国土の均衡ある発展のためには森林を考える必要がある」ということで、「森林化社会」という言葉をつくったと思います。しかし精神論であって、木材産業、製材業、木造建築という問題にどう絡み合って進行するのがいいかという政策論には至らなかったですね。林野庁が全林野労組対策でそこまできなかつた面もある。

戸沼：山形県の鶴岡市でも森林文化とか、森林の学校とか、力を入れていますね。森や森林をテーマにしている自治体もけっこうあるのでしょうか。

榛村：山の多い市町村はたくさんありますが、テーマにし切れていないのではないかと思います。奈良県川上村などもやっていますね。とにかく下河辺さんは、辻さんみたいないろいろな地元の苦労人を知っていて、激励しては焚き付けたり、勉強の材料にしたり、おだてて「やれやれ」とけしかけたりね（笑）。

辻：まあ、私がおだてられたほうかもしれないですね（笑）。

榛村：そういうことが好きだった。もう少しまともに言えば、そういうところからあおって、「中央集権をつぶしてしまえ」、あるいは「縦割行政を是正しなければいかん」、あるいは「300圏域にまとめなければいかん」と。そういうことができかかったとき、「これは危ない。下河辺を野放しにしておいてはいかん。彼を排除する」と言って、自治省の包囲網ができた。だから、1億円配分のときも、最後は自治省が交付税でやったことになって終わりました。

戸沼：僕らではうかがい知れないけれども、省庁のせめぎ合いというのがあるのでしょうか。そのバランスで成り立っているんですかね。

世界最速のリニア中央新幹線と早川町

戸沼：リニア問題を辻さんはどう思いますか。ほとんどがトンネルで、早川町は唯一景色が見える場所だと聞きましたが。標高はどのくらいのところを走るのですか。

辻：海拔 700 メートルか 1000 メートルぐらいの所を通過します。南アルプスの谷の一番深いところが早川町で、25 キロメートルのトンネルが 500 メートルほど視界が開けます。

早川町を近代史で見ると、明治の終わりから大正から水力発電の開発で、川の利用に伴って地域が活性化してきました。地元の変化を見てきた中で申し上げますと、新しいリニアの建設は、活性化の元になると思います。30～40 年間何もなかった地域にこうしたプロジェクトが持ち上がったわけで、いろいろな議論はあるにせよ、次の時代に向かっている足がかりにしたいですね。ここ 10 年にかけてリニアの建設がありますが、国内だけでなく世界が注目している技術であり乗り物です。ですから、国家を挙げて取り組むことについては、まさに 21 世紀の一つのテーマになればと思っています。

戸沼：早川町を通るときは少しゆっくり走ってもらえるといいですね（笑）。

辻：そうですね。透明のフードにして見学ができるようにしていただきたいですね。南アルプスを 25 キロメートル抜くということ自体がすごいですよね。アルプスの中がどんな地質や岩

盤になっているのかにも興味があります。

榛村：25 キロメートルって、どこからどこまでですか。

辻：甲府盆地から大鹿村までで、早川町の 500 メートル部分以外はすべてアルプスの中です。3000 メートル級の山々の 1000 メートル部分のところを通るトンネルですから、大変なものですね。

榛村：スイスのアルプスにもリニア計画があるらしいですね。日本の外国人観光客も、早くも 2000 万人になりました。3000 万、5000 万人という時代が来るともいわれますから、駅を造って、リニアを持つエコパーク、エコパークを持つリニアになればいいですね。

人口減少時代の幸福論

榛村：下河辺さんという方は、一言では言えないけれど、とにかく傑物・怪物ですね。歴代首相の「この瞬間が決め手だった」というその場面に下河辺さんは立ち会っていますが、そうさせる情報力があつたということですね。佐藤栄作は下河辺さんを嫌いだったという噂がありましたね（笑）。下河辺さんは大磯の吉田茂邸にも呼ばれて何度も行っていたようですが、佐藤さんが行くといつも待たされる時があつて、そのとき出てきたのが下河辺さんだったと。吉田茂にも好かれていたし、気概があるやつだと思われていたんでしょうね。もうひとつ、私の記憶に残っているのは、「とにかく日本の高度成長はすごくて、GNP を 2 倍にすると行っていたら、3.2 倍になってしまった。このエネルギーに国土計画は追いついていけなかった」と言っていたことです。下河辺さんに「時代の証言者として何か書いておく必要があるんじゃないですか」と詰め寄ったことがあります、「そういう気持ちにはならないだろうな」なんて言っていました。書かないことをポリシーにしていましたね。

辻：いま人口減少問題が顕著になってきましたが、国が一生懸命に「増やそう」というのはおかしいのではないかと考えています。減ることを素直に認めたいうえで、その中でどう生きていけばいいのかを考える必要があります。また、首都圏に人口が集中して地方はどんどん減っている。私は「早川町は日本の先進地だ」と言っています。人口減少、高齢化、少子化、福祉、産業、教育など考えなければならない、切ない話がどこよりも先んじています。そうした中で、常に不安や不満を抱えている人口 1 万人の町と、みんなが「この町がいい」と言って暮らしている人口 1000 人の町と、どちらがいいのかということです。たとえ 500 人でも、みんなが「この町はいいよ」と言っているなら、その町はいい町ではないか。なぜそういう尺度で評価をしてくれないのかと考えています。

戸沼：住んでいる人たちが幸福感を持ちながら日常を維持していけるかどうか、そういう状況があるわけですね。

辻：これからの尺度は、モノやお金ではなくて、そういう幸福感ではないかと思うんですよ。そういう発想に移行していくことを、国の姿・かたちとしてあらわそうとしてくれないのは、残念だと思っています。

戸沼：東京に比べて抜群にいい環境ではないですか、早川町は。

辻：いいとは思ってはいるのですが、現実には厳しいですし、不安もあります。高齢者を山村で受け入れるという解決策よりも、新しい見方を国土づくりで示していただきたいですね。地方

創生ということで人口減少が語られますが、人口は増えませんよ。増えないということをなぜきちんと言わないのか。減少する中でどういう社会をつくっていくのか、ということを考える時期に来ているように思います。

戸沼：人口 5000 万人でも一人ひとりが幸福な国をつくろうじゃないか、ということですね。

阿部：大変興味深い話を聞かせていただき、ありがとうございました。「下河辺淳アーカイヴス」は、下河辺さんのいろいろな活動の集積でもありますから、今後も大切に、またできるだけ生かしていきたいと思っています。

(了)

(2016年5月12日実施)



【鼎談者略歴】

榛村 純一（しんむら じゅんいち）氏

1934 [昭和 9] 年静岡県掛川市生まれ。早稲田大学文学部卒業後、家業である林業・製材業経営に従事。77 [昭和 52] 年 9 月～95 [平成 17] 年 3 月まで 7 期 28 年掛川市長を務める。83 [昭和 58] 年 10 月～2011 [平成 23] 年 3 月財団法人森とむらの会理事長。現在は、公益財団法人静岡県林業会議所会頭、公益財団法人日本茶業中央会会長、公益財団法人静岡県茶業会議所会頭などを務める。

榛村純一ホームページ <http://shinmura.jimdo.com/>

辻 一幸（つじ かずゆき）氏

1940 [昭和 15] 年山梨県早川町生まれ。青山学院大学卒業。80 [昭和 55] 年早川町長に初当選し、現在全国最多の 9 期目を務める。一般社団法人山梨県森林協会会長・山梨県治山林道協会会長、全国森林環境税創設促進連盟会長、ダム・発電関係市町村全国協議会会長。

早川町 <http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/index.html>

戸沼 幸市（とぬま こういち）氏

1933 [昭和 8] 年青森県生まれ。早稲田大学工学部建築学科卒業。72 [昭和 47] 年助教授、77 [昭和 52] 年教授、2004 [平成 16] 年に名誉教授。工学博士。05 [平成 17] 年 7 月に財団法人日本開発構想研究所（12 [平成 24] 年より一般財団）の第 5 代理事長に就任、現在に至る。

Key Information

小学生のみなさんがたへ～一〇〇〇年の不思議な力～

下河辺淳

小学生のみなさんがたに何かご挨拶をと言われましたが、小学校の先生じゃありませんので、何か教えようと思ってしゃべるわけじゃありません。わたしたちは、全国から、これからの世の中について話し合いをしようというので集まりました。この北小学校をお借りして、こうやって話し合いを始めたところですが、まず、会場を貸していただき、こうつくっていただいたことにお礼を言いたいと思います。

わたしたちは、一〇〇〇年の学校という題で話し合っていますが、これは本川根の町長さんが言いだしたことです。わたしたちは、山梨県の早川町の町長さんとこの仕事を始めましたが、みなさん方の町長さんが賛同してくださってこのような会になりました。周りにいるたくさんの人たちは、全国から集まってきて、昨日から熱心に討論しています。

今日は、これからみなさんにも手伝っていただいて、ワークショップということで、午前中一緒に楽しみたいと思います。その時に、仙人と一緒にということ、みなさんにお話ししてあると思いますが、仙人ってきくと、杖ついてて、髭ぼうぼうで、ちょっと普通じゃない、えらい人っていう感じがあると思います。けども、ここで仙人というのはみなさんのことを言っているわけです。ここに住まうただの人を仙人と言おうと思っています。特別な人ではないということです。

ワークショップで楽しむということは、みなさんが集まって楽しむということですから、仙人の仕事を考えたとき、仙人というのはそういうことだとあなたがたが思えるといいと思います。その仙人は、あなた方自身のことですが、どういう人かということ、一〇〇〇年前のことを思うことができる人。そして一〇〇〇年間色々なことをやった祖先や先輩たちが知恵を出して助け合って生きてきた、そのことを仙人たちの一〇〇〇年っていいたいんです。

それは、小学校のみなさんがたは自分では気がつかない。あなたがたに宿っている不思議な力なんです。みなさんが何かを一生懸命になってやればやるほど、一〇〇〇年間の中で培ってきた知恵がみなさんの中に宿っていますから、やればやるほど一〇〇〇年の不思議な力がでてくるといえることがはっきりしてきたと思っています。今日は、色々なテーマに分かれてやっていただくけれども、そこであなた方が一生懸命やればやるほど、一〇〇〇年の歴史が甦ってくるということを感じるのには愉快なことです。

これまでの一〇〇〇年が体の中にある

それから一〇〇〇年の学校というと、とても大きな意味だということを感じて欲しいと思っています。一〇〇〇年の学校の学校は小学校の学校とは違って、この地域全体が学校の役割を果たしてくれるので、いろんな勉強ができます。そして、小学校で生活しているあなたがたも、

一〇〇〇年の歴史を体の中にもって生きているということと、お互いふれあいつきあってみることがとても大切だと思っています。

ところが、それだけじゃなくて、これからの一〇〇〇年に向けてもみんな語り合いたいです。これまでの一〇〇〇年ということ自分の体の中に秘め込んでいるあなたがたが、一〇〇〇年後のことを思って下さることがとても重要なんです。



少し、難しい話になるけれども、今二〇世紀の終わりに近づいて間もなく二一世紀です。その時に、二一世紀って何かということ、今、世界中の人間が議論し始めました。二〇世紀は素晴らしかったから、とっても豊かになって、この地域も二〇世紀のおかげで豊かになりましたよね。けれども、果たしてこのままでいいかって言うと疑問なことがとても多くて、新しい二一世紀の生活を語り合おうっていうのが、一〇〇〇年の学校の過去一〇〇〇年からこれからの一〇〇〇年ってということとつながる話なんです。

そして、わたしは間もなく死んじゃいますけれども、みなさんは二一世紀に生きていく人たちです。子どもだからということではなく、一人の人間として、一〇〇〇年後のことも考えるということをやっていただくといいなあ、って思います。

二一世紀は東京に出るのが幸せではない

その時に一番大きいテーマは、二〇世紀はどうしても都会とか町に出て行かなくてはダメで、一番は東京まで行き着かないと、というのが二〇世紀だったと思うんです。だけど、二一世紀は、東京に出るのが幸せではない。それは、そろそろはっきりしてきていて、それじゃあ、何を求めるかっていうときに、いろんな求め方があって、宗教のことを考える人もいますけれども、わたしたちは、日本に過去一〇〇〇年が作り上げたかたち、大井川の上流ということ、あるいは南アルプスの麓ということが作り上げてきたことが、大きな財産だっていうことに気がつき始めました。そしてこうやって全国から集まってきて、大井川の上流、南アルプスの麓でいったい何が価値あることなのか、何が大切なのかを話し合おうということで、昨日から始めています。参加した人たちがみんな、何か心に感ずるものがあるって、ということになりそうなんですけれども、わたしはその時に、このアルプスの麓、大井川の上流に暮らしている小学生はいったい何を考えているんだろう、ということを知りましたら、それじゃあ集めるから、おまえしゃべりなさいと言われて、今こうしてしゃべっています。ですから、みなさん一人ひとりが何を考えているのかを伺いたいのが本当の気持ちです。

その次に思いますことは、みなさんどうでしょう、小学校を出て、中学校に行きますよね。そして、高等学校へ行って、大学まで行こうという希望の人もいっぱいいるんじゃないですか。けれども、自分はこのまま町に残って、町の仕事したいとか、親の仕事を受け継ぎたいとか、という人もいますでしょう。そこのところは、自分の考えで、一人ひとりが色々考えたらいって思うんです。小学校五・六年生っていうと、ちょうどそのことを考えようかなっていうとき

に来ているように思うんです。中学校・高等学校くらいになるともう自分はどう生きていくか決めないとやっていけないとなるんですけど、今、ちょうど出発点に立っているみなさんがたは、一人ひとりどうやって生きていくのかということを考えて欲しいんです。東京に出ていくということもとても大きな意味があります。生まれた所に一生いるというのもとても大切なことです。世界に飛び出してもいいし、東京に行ってもいい、いろんなところで自分のやりたいことをやっていくことが一番素晴らしいことだから、自分がやがてこの町を出ていくということを考えながら小学校を終える人がいてもいいって思うんです。けども、どうしていいかわからないって人もいっぱいいるがもしれない。しかし、いろいろと自分のことを考える歳になったなあ、みなさんが思ってくださいるといいと思うんです。町を離れたら、二度と帰らないという人もいるかもしれません。しかし、余所を回って、苦勞を重ねて、色んな新しい能力を身につけて町へ戻ってきて、町で取り組む人がいれば、もっと素晴らしいことかもしれません。

だけれども、どこへ行って、何をしようとも、みなさんはアルプスの麓の大井川の上流で暮らしていた人間ということは一生消えることはないのです。それが、一生に影響して、そのことが、どこで何をしようとも、その仕事に一番役立つおおもとなるということも考えて欲しい。今、ここで、こうやって議論しながらも、みなさんが毎日ここで暮らしているということの大切さを知って欲しいと思っているんです。

ただ、どうでしょう。学校の悪口になるけれども、小学校で「この町が世界で一番豊かで価値がある町だ」っていう先生のお話っていうのはありますか。便利になって、この町ももう田舎ではないっていうことを言う先生はいるかもしれません。今は、そういう時代ではないっていうことを言うと、先生は困るのかも知れません。けれども、二一世紀に生きるみなさん方は、そのことを色々考えてほしいんです。

非常に簡単なことを言うと、みなさん知っていると思うけど、この地域は、最初は船で川を利用して生きてきたんじゃないでしょうか。ですから、川の利用の仕方ということについては、天才的な知恵をもって、いろんなことが残されていると思うんです。ところが、一〇〇年前から日本は鉄道を入れることになって、大井川にも鉄道が入ったんです。そのために生活は鉄道にたよることになりました。川の場合には、下流に運ぶのは楽だけれども上流に運ぶのは大変ですよね。だけれども鉄道だと上り下りが技術によって同じように運べるようになって、この町もずいぶん発達しましたね。ところが最近になると、自動車がなければこの町でもやっていけなくなったんですね。そして、自動車がいっぱいになって、この山間の地に駐車場がいっぱいできたというのも一つの変化です。だから、川を利用して知恵、鉄道を入れて発展した町、そして車が入ってきたという現代。しかし、どうでしょうか。これからこの町で生きていくのに、車ももっと増えるっていうことはあまりいいことじゃないかもしれません。したがって、川の利用の仕方から鉄道の利用の仕方、自動車の利用の仕方まで、あなた方は議論していったほうがいいんじゃないかって思うんです。

毎日のことだから習慣になってしまっているから、改めて考えるということがなくなっているけれども、日常的なことについていったいこれでいいのか、ということをおあなたがたが仲間と大いに議論していただいて、よく気がついてみたら、今日のワークショップで仙人のことと

して行われる色々な知恵がむしろ、もっと価値のあることだっていうことにつながって、そのためには交通ってどうなるかっていうことも議論になる。これからの二一世紀というのは、交通よりも通信の方が重要になってきますから、携帯電話からパソコンからインターネットというようなことで、この町が世界とつながっていくことになる。だから、パソコンということでインターネットと親しむことをはじめたらどうか。特に、大井川の上流やアルプスの麓の地ってというのは、交通に支えられる以上に、そういった情報通信に支えられるっていうことになると思います。

しゃべっているうちに、大人の話になっちゃいましたけれども、何か五・六年の小学生が、そういう地球の動き、宇宙の動き、千年の歴史と未来ということに対して、体の中に何かを感じてそれを追い求めていくひとりになってほしいと思います。こういう話って普段聞いたことがないでしょうから、「それいったい何」っていう感じがあるかもしれない。しかし、今日わたしがお話ししたことが、一つずつ歳をとって、中学校、高校、社会人になるに従って、あの時の話はそういうことだったんだな、とつながってくれたらとても嬉しいということです。

わたしたちが、こうやってみなさんに温かく受け入れていただいて、この地域でこういったお話し合いができることはとても大きな意味で、みなさんに感謝したいと思います。このくらいで止めて、皆さんが年寄りに何か聞いてみたいことがあったら聞いてみて下さい。どうも。

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『仙人の秘密を覗き、仙人になる 日本上流文化圏会議 1999 「1000年の学校 in 南アルプス」』 日本上流文化圏文庫（5）、2000年3月、早川町

資料番号：200003019

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=200003019&sub=>



森とむらの会の 15 周年に想う

下河辺淳

高木さんと話し込んでいるうちに、森の話となった。

高木さんは、江戸の真ん中で生まれ育ち、大都市育ちの人である。高木さんが楽しそうに森を語るのには、ちょっとしたユニークさがあり、都会人の森を見る目が感じられて、これが動機となって、折々森を語り合うようになった。高木さんが森に特別に興味を持ち始めたのは、主計局時代に森の予算を担当して、北海道の演習林を見てのことと聞いている。富良野でどろ亀（高橋延清）さんと酒を飲み語り合ったことが語り伝えられている。

ある日高木さんから、都会から森を語り合う集まりをつくってはどうかという提言がでた。会の名前を「森とむら」ではどうかと言い出した。

その頃私は国土管理、国土政策を仕事にしている、わが国の国土は「木と水と土」の管理が基本であると考えているのに、世間は交通通信で国土を管理することが優先して、人々も大部分は都市に住むという時代であって、森や水系に関心を持つことは難しいことであった。高木さんの「森とむら」の提言は、私にとってとても良い機会になると思った。

林野庁の人々は、高木さんの提言に戸惑いながらも、都会の人々が森を語り、林野行政を理解してくれることは良いことだと考え、財団法人として森とむらの会を認めることとなった。ただし、財団の設立に必要な資金を集めることが必要であった。しかし、企業献金ということを考えたくなかったこともあって、個人献金で集めることとなった。友人・知人に語りかけ、100万円の個人献金を集め、個人献金をした人を会の顧問として、100人を目標とした。どうやら顧問会議が発足して、森とむらの会の活動が始まった。

創立 15 周年にあたり、「森とむらの会」の発足当時のなつかしさを思い起こしている。

かつて土光臨調で、土光会長が「臨調の最後の大事な仕事は、森林の管理をどうするかである」と言われたことも重い発言と思い起こされる。

1998年に第5次全国総合開発計画が閣議決定された。1977年の第3次全国総合開発計画で、水系主義による流域社会の展開を提案したが、これが国民に浸透せず、各流域で挑戦しながら、結局敗北した経験をしたけれども、第5次全国総合開発計画で再度21世紀に向けての国土管理上、最も大切なことは、流域の総合的管理であることを閣議決定することができた。

これから21世紀に向けて、水系の総合管理について行政改革を断行し、流域社会の地域主体の管理体制をとることとしたいものである。建設省の河川審議会は、明治以来の河川管理方式を改めることを提言し、明治以来の河川管理について、革命的な展開をテーマに本格的に検討する時代となった。

既に森林行政については、流域管理方式をとっている。

この流域主義は、「木と水と土」が国土管理の基本であることを原点としている。

木は森であり、水は水系であり、土は流砂であるといっただろう。日本人が日本列島に棲みつてきた歴史も、これから棲みつていく未来も、森と水と土とどのように共生するかが鍵であり、その関係から日本の文化が生まれ、時代とともに変化していくことになる。

一方で、日本人が日本列島に棲みついた縄文文化を見てみると、海と川を利用しながら、沿海・河口は自然条件が不安定で棲むに耐えず、丘の上に棲みついていた歴史であり、森の文化である。これが稲作文化を入れて居住環境が変化するが、平安文化の時代には都の文化が中心となり、奈良、京都から小京都と称する地方都市に伝えられていった。

この都文化は、境内や屋敷内の森が基盤となった。

鎌倉・江戸時代になると、城が全国に構築され、城下町と水田の管理が支配者大名の課題となり、城の文化の時代となるが、城は森林と水に包み込まれた環境の中につくられていった。藩制が完成して、どこの藩でも森と水による流域社会として上流下流の一貫性を持ち、生態系を巧みに活かした地域文化を構築した。



これが明治維新により、日本の歴史と伝統を切り捨て、ヨーロッパの文化・文明を輸入することに全勢力を注入することとなった。つまり全てに洋風化の近代化政策が取り上げられた。公共行政型の森林管理、水系管理が始まり、人々の生活にとって、直接的な関係は薄くなっていった。戦後農地は、農地解放政策を取り、米づくりの戦後政策が講じられ、今日では米作農民の自主的活動も市場化している。しかし森林は解放されず、明治体制をそのまま残して今日に至っている。

日本列島は、世界の経済大国、文明国家といわれながら、森林の面積は65%と世界の例外となっており、森林の破壊が避けられている。このことは、森林行政があつてのことではなく、日本人がなぜか沿海もしくは埋め立て地に居住することを選択し、20世紀人口増加の9000万人に相当する人口が海に棲みつき、山から海に向けて人口が流出していったことで、森は残った。

しかも戦後の造林植林で21世紀の木材蓄積量は決して小さいものではない。

人口は都市に集中し、都市は自然を破壊して、近代技術により、都市文明を創造して、20世紀都市文明の時代となった。自然に挑戦し、自然の悪条件を克服する文明であった。

しかし、再度流域主義のもとで、自然と共生し、自然に順応して生きるという思想のもとで、21世紀の新しい技術文明を創造することとなってくる。

都市についても、これまでのように、全世界で競い合った大都市、巨大都市建設の時代ではない。全世界で小都市、近隣コミュニティーがネットワーク化される分散型社会が共通する発想になってきている。都市と農村という対立概念から考えるのではなく、都市でも農村でもない人間の居住環境・居住空間がいかなるものであるのかが求められている。

古くから田園都市、公園都市、小城鎮、小都市などの提案があるけれども、高度科学技術に支えられて、人間の居住形態がどのような発展を示すものか、これからの課題である。私は、この新しい居住を表現するのに「むら」という日本語がよいと思う。

インターネット・パソコンなどのホームページで、世界に向けて「MURA」という言葉を世界用語化してよいのではないか。

この辺で、明治の廃藩置県を改め、地域社会のために地方行政を確立したらよいのではないか。全ての課題を広域行政ということでは、主体性を確保し得ないのではないか。

特に水系により「水と木と土」を統合管理し、水と森をそれぞれの流域地域で管理することを考えてみてはどうか。

各流域社会ごとに、森と水の管理システムを確立し、主体性を持ち、自主、自立、自律が保証された森と水の管理の専門家集団の組織を創設してはどうか。行政の国、県、市町村は、流域管理に関する全ての権限をこの組織に一切委任してはどうか。

更に言うならば、林地管理を革命的に改革してはどうか。

地目林地は、国有林、公有林全てとともに、私有林も全て公有化して、私有林の私有財産権を制限してよいのではないか。林地である以上、現在森林になっているかどうかは別問題で特別な措置があつてよい。森は林地によって管理される。その林地は公、つまりみんなのもので国有公有地ということではない。

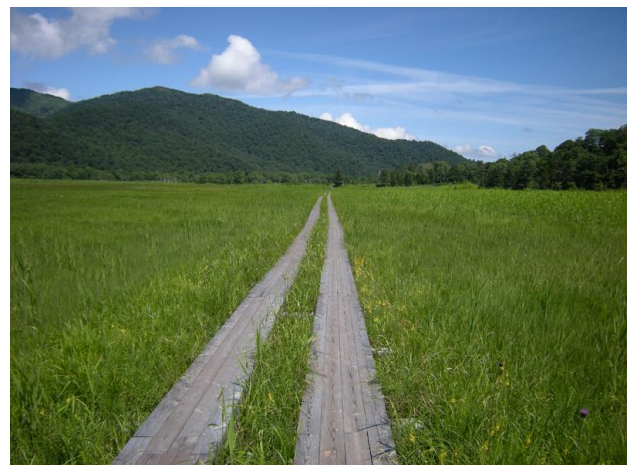
私有財産として処分の自由があつてはならない。一方で財産相続税や固定資産税で、林地の管理が継続性を失ってしまうことは許されない。林地の管理を新たにどのように、誰に委任するかが問題として残っていると看做しても、林地の資産管理は、公のものであつてもよいのではないか。国有林野事業も全森林管理の新しい方式の中で再検討されたらよい。木材産業、林業としての森林管理についても輸入木材の自由化政策との関連もあり、日本の森林蓄積の量との関連もあり、新しい産業政策として再検討することとなるだろう。場合によっては、木材産業は民営化することもあるだろう。この前提として林地は公有制であることを明確にしておく必要がある。

ただ、こうした「森とむら」の論争をするにせよ、やはり高齢化が押し寄せてくる。

そもそも森とむらの会の発足時とは異なり、高齢化が進んだ。現場の森でも戦後森を守り続けてきた人々は既に高齢化しており、若手はほとんど流出して、まちに出ていってしまっているという現実で、むしろ森の中の老人介護が課題になり始めている。林野庁でも戦後林業労働者として関係してきた人々の老人介護が大きな問題となつてきている。

老人の経験と知恵を最大限に活用する道を聞くとともに、都会から若い体力と知力を動員することでなければ、森は守れない時代に入っている。

森とむらの会も高齢になった会員が山に向けて、都会の若い人々を動員することを考えてみるのが、とても大切ではないかと思う。



【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『21世紀の森とむらを考える』、1999年10月、(財)森とむらの会

資料番号：199910001

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199910001&sub=>

塩と焼鯖とお米のルート

下河辺淳

日本人は塩と米で生きてきた

人間と塩という関係は、地球に人間が出現してから今日まで一貫した関係をもっている。海から出てきた人間は、塩なしには生きていけないという宿命を背負った動物なので、地球の至るところに住むようになってからも、その人間に向かって塩を運ぶということは、極めて当たり前のことでもある。都市の形成過程にはいろいろあるが、塩が集まる所へ人が集まったといえるほど、人間と塩との関係は重要なものである。

アジアでは、稲作文化と塩とが密接につながっていることが一つの特色で、稲作文化は、中国の市部、タイ、ベトナム北部の辺りで始まったと言われ、それが日本へ伝わり、弥生文化が発展したという歴史がある。このときも、やはり塩と米というのが大きなテーマで、今でも中国雲南へ行くと、必要不可欠なことを「米と塩」という言い方をするほど、つながりのあるものとして認識している。

ただ、今の日本では、稲や米への認識がずいぶんと変わり、品種改良の積み重ねにより、つまりグルメとしての価値が生ずるようになってきた。人間が開発した稲の品種には、六百種類ほどあるそうで、その中には、今日のような美味しいお米ばかりではなく、まずくて収量は少ないけれども、体のためにいい米という品種もあったと言われている。

最近では、赤米・黒米ぐらいは知られるようになったが、それでもほとんどの日本人は、米は白いものと思っている。けれども、実を言うと米の色は無い色は無いというくらい多彩で、味や成分もまた然りだから、塩の道沿線の田んぼで、どんな稲を作っていたのか探してみると、ひょっとしたら、私たちの祖先が、体にいい米、漢方米というような米をいろいろ作っていたかもしれない。いずれにしても、日本人は塩と米とで生きてきたという歴史をもち、塩の道においても、米と塩との関係を論じていくことで、この地域の人間の生きざまを見ていくことができると考えている。

焼鯖がつくった文化の基礎

塩の道沿線、特に山間部では、おそらく塩と米とで非常に苦労してきたと想像されるが、基本的には山の幸が豊かであったので、これまで人々が生きてこれたのだと思う。縄文時代までさかのぼると、人口は六十万人しかいなかったと言われ、この日本列島で生活するには、山の幸が豊富で夢のような宝の島だったのではないかと想像できる。

いずれにしても、山の幸文化に米文化が流入し、どういう文化が形成されていったのかを、おいに調べてみる必要がある。

ところで、本論の題目に「焼鯖」という文句があるのは、塩の道には塩と米と山の幸のほかに、海の幸もあったからである。



塩を運ぶのと並行して、海の幸を運ぶ。生魚や昆布、ワカメ、魚の干物もあったであろう。

さらに米文化が発達し、米に酢を混ぜて生魚を保存することを覚えた。今日、お鮓というのご飯と一緒に食べるが、この時代は、酢のご飯に生魚を挟むことで長期保存したのである。これによって、山の中の人たちでも海の幸に遭遇できるようになったが、その中で興味あるのは鯖である。海で鯖を焼き、串に刺して、それを駆け足をして山の中へ売りに行く。駆ける速度と焼鯖が腐るまでの時間との関係で配給範囲が決まるので、海岸から内陸部のどの辺りまで焼鯖を食べた歴史があるかを調べれば、駆け足で焼鯖を運んだ到達ラインが見えてくる。

この塩の道会議の場合でも、太平洋あるいは日本海から焼鯖はどう運ばれたかを聞きたいと思ったので、タイトルを「塩と焼鯖とお米」としたが、塩と米という文化の上に山の幸、海の幸ということの組み合わせが、この地域の一つの文化の基礎であったと思っている。

津々浦々と峰々谷々

ちょっと話がそれるが、日本人は弥生時代以降、海辺に住む民族という特色をもつようになり、山間民族のイメージは稀薄になった。それは、日本人にとって全国をあらわす表現に「津々浦々」という言葉があるように、日本人は「津」か「浦」に住んでいたわけで、津々浦々が基本であって、山というものは非常に特殊な存在であり、場合によっては信仰の対象であった。

しかし、おもしろいことに、朝鮮半島の人たちには津々浦々という言葉はなく、むしろ、海辺に住むという思想はないといってもよく、「峰々谷々（ぼうぼうたにたに）」と言っている。この塩の道のメンバーをいろいろと見ていると、津々浦々からバックアップされているにしても、生活そのものは峰々谷々型ではないかと思う。だから、峰々谷々にあるこの塩の道というものが、どんな文化をもっていたのであろうかということに興味津々なのである。

異文化の波を受けて育つ

人間と自然という関係の中では、やはり食べ物は基本的な要因であって、自然に制約されるからこそ、そこに知恵も出て、料理へと発達したと思う。京都でなぜ料理が発達したかといえ、食べ物がなかったからだというのが一番明快で、食べ物のないところは、必ず料理が発達する。これは北京でもパリでも同じではないかと思われ、津々浦々型の日本人にとっては、収穫物をそのまま生で食べれば美味しかったので、あまり調理を必要としなかった。したがって、山間地域で、一体どういう山の幸、海の幸を取り入れた食べ方をしていたかということは、文化を探る上で非常に重要なポイントの一つである。

また、日本にとって木の文化、森林の文化が、どのように息づいてきたかということも注目すべき事柄で、この塩の道を歴史的にたどりながら、文化という側面で、どんな豊かさと多様性があるかということと、そして津々浦々と峰々谷々の交差点としてどんなおもしろさがあるかということをおとさんと語り合う必要があると考えている。

ここで私が特に言いたいことは、文化というのは、ある段階で固定化してしまうことはなく、基本的には異文化との出会いにより絶えず刺激を受け、新たな文化に少しずつ変化している。そして、これが日常化すると、伝統文化とか伝承文化と言われるわけである。

塩の道沿線の地域では、歴史をさかのぼると、いろいろな物語が形成されていて、これらは神社・仏閣、祭りの中などに、いろいろな形で秘められている。したがって、二十一世紀における塩の道の物語は何であるのか、この塩の道会議によってどんな異文化の波を受けるか、その異文化の波を人間と自然との関係という塩の道の歴史の中でどのように受け入れるかというあたりが、今日の大きなテーマになると思う。

近代以前では、神社・仏閣などが、地域の物語を創る文化的センターの役割を果たしてきたことは明らかである。山岳信仰も含め、これらが文化・芸能の殿堂でもあり、異文化と接する場であったからで、日本の塩の道として代表性をもったこのルートについて、こういう勉強をすることは、とても大きな意味がある。塩の道は、日本列島の津々浦々から山に向けて数多くあり、この一本のルートだけではなく、日本全体について、塩の道論がもっと活発に議論されてよいのではないかと思うのである。

インドア文明からアウトドアへ

二十世紀文明はインドア文明であった。もともとは自然から身を守るためだったのだが、結果として、自然に対して非常に閉鎖的な住宅となり、江戸時代のように縁側から自然へとつながって、その境目が無いというような居住理論は影をひそめてしまった。すきま風を防ぐことから始まり、暑ければ冷房、寒ければ暖房というように、インドアに閉塞され、しかも、美術も音楽もスポーツまでもが屋内となった。



もう一つ二十世紀文明で言えるのは、食べ物のことである。東京では、世界中の物が安く食べられる。そして、異常にグルメな生活がどんどん展開していった結果、近代化が進めた食生活のあり方それ自体に疑問符が投げかけられるようになった。それは、高カロリー食による栄養過剰と都会の便利さから来る運動不足により、高額なお金を払ってまでもスポーツジムに通うという、本末転倒な状況が生まれたからである。

こうして見てくると、二十一世紀への方向性として、どうしてもアウトドアというテーマを議論しなければいけない。人間は自然の中で、きれいな空気の中で歩くということがなければ、人間生活にはならないのであって、塩の道沿線に住む方々は、実はすばらしいところに住んでいるので、近代化というものが失ったものをもっているはずである。

人間性を再発見する舞台が塩の道

二十世紀は世界が大都市依存型であったが、これがようやく否定されるときが来たと思う。環境面やエネルギー面、いろいろな側面から見て、もう大都市に依存するときではない。通信技術が進歩したこともあり、小都市でも何不自由ない環境をつくるのがいくらでもできるので、二十一世紀は、むしろ小さい街というものが光り輝くということテーマにして、その小

さい街がいかにネットワーク化するかということが重要なポイントになるのではないかと考える。

さらに、二十一世紀を控えて重要なのは、四季の変化に対する価値観である。二十世紀文明というのは、生活様式も生産体制も四季の変化を乗り越えて、一年中安定したものを求めてきたが、最近では、四季の変化を十分取り入れた豊かさというものが本物ではないだろうか、ということを行うようになってきたのである。

これまで指摘したことからわかるように、二十世紀文明が二十一世紀文明に変わるということと「塩の道」は、非常に深い基礎のところにつながりをもっているということを申し上げたい。塩の道のメンバーは、人間と自然という関係の中で、根深い問題を日常的に背負い込んでいるということを再確認していただきたい。だから、この塩の道会議を単なる今日的な地域の発展、地域振興ということにとどまらないで考えてほしいのである。

つまり、人間性というものを二十世紀文明がかなりの部分で喪失してしまったということに対して、二十一世紀では人間性の再発見を試みる。そして、試みる場が必要となるというようなことが、最近、世界の識者の中でだいぶ議論されるようになってきている。だから、塩の道の米とか山の幸、海の幸ということから始まって、これを舞台に物語を演じて二十一世紀文明へと接近していくということは、きっと将来、評価されるのではないかと思う。

感性に訴える情報サービスができるか

しかし、実際に自然と人間の新しい関係に取り組み始めると、意外と難問でなかなかできない。なぜかという、これまでそういう角度で自然を見ている人が、案外いなくて、文化の点、環境の点、動植物の点などすべてについてその地域を紹介する知的な仕事というのは、そんなに簡単ではないということに気づいたわけである。

ある地域の情報を見たい、接したいということで、その情報と実際の自然や文化と接することに関心をもって来てくれる人たち、それが本来の観光であり、光ではないかということを行うわけだが、これからの「塩の道」について考えようとするときも、どんな情報を提供できるかが重要なのである。

観光地が情報を発するようになるには、当然だが、そこに住む人たちのバイタリティーによって、その情報産業をつくらなければならないわけである。しかも、交通というよりは通信型の、マルチメディア型の観光というシステムをどうしてもつくらなければいけない。先程、この塩の道は異文化と出会うことによって新しい文化ができるということを目指したが、ひょっとすると、その出会う異文化というのはマルチメディア文化かもしれないと思ったりもする。

こういう情報に接したときに、人間は体感・実感するとか、共感するとか、お互いに交歓するわけで、人間が本来持っている感性に訴えるべき情報をサービスするというのが観光ではないかということを行いたいと思う。

高齢社会は魅力的と頭を切り替える

地域文化を掘り起こしていくには、高齢者の役割が非常に大きい。やはり、人生経験の長い方が持っているその地域の経験・知識というものが、基本的なデータであり、高齢者の方々の

協力が、自然の点でも文化の点でも極めて重要なことである。観光情報にとっても、若者だけではなく、人生経験豊富な高齢者の役割が、極めて重要である。

もし、この塩の道会議をきっかけに生涯学習街道の展開が始まって、何かセミナーのようなものを運営するとしたら、その責任者は少なくとも二十年ぐらいは担当することが必要ではないかと思う。とても二、三年の異動周期でやれる仕事ではない。

ところで、近い将来、高齢化社会が来るということで、悲劇のどん底みたいに言う人が多いが、むしろ逆に日本で唯一期待できるのは、高齢化社会ただ一つしかないと思う。経済もだめ、技術もだめ、政治もだめ、行政もだめと、だめだめの合唱だが、高齢者だけは確実に増加していくと予想されている。

日本には、現在、六十五歳以上が一八〇〇万人いて、そのうち、社会的にお世話しなくてはいけないのは、多く見積もっても三百万人くらい。残りの一五〇〇万人はどういう人たちなのかというのを経済企画庁が調査したら、意外なことに、極めて健康で、貯金は平均よりも多く、九十パーセントの人が持ち家に住み、余暇もいっぱいあるということがわかった。こんな立派な資源は、日本には他にない。こういう人たちが一五〇〇万人もいるのに、世の中が暗いなんて言うのは、事実誤認も甚だしいと思う。一番ピーク的时候には三三〇〇万人まで増加し、やはりこのうち六百万人ぐらいは、社会的にお世話をしなくてはいけないが、あとの二七〇〇万人は、元気で暇があってお金もある人たちだ。日本で好ましい資源の増加は、これ一つしかないと言っているのだが、元気な人たちは黙っている。高齢化社会の捉え方が違うと思う。

つまり、高齢化は絶望的なものではなく、魅力的なものだというように頭を切り替え、有能な老人の役割・使い方というものをみんなで工夫することが、塩の道沿線をはじめとする地方の生きる道だと言いたいわけである。

高齢化と過疎化を目の敵にして、これを解決するのが地方行政のテーマと思い込んでいる方が意外と多いが、本当はそうではない。縄文時代と比べたら、あるいは戦前と比べたらどれだけ多いのかとやっていくと、自分たちの地域の人口がどのくらいが一番快適かということと、過疎化とは別の議論になる。

光齢化と佳疎化が進むほどまちはよくなる

戦後、農村は過剰人口を抱えていたため、二男、三男を東京に出すことが一番大きな仕事であった。逆に今は、それが行き過ぎてしまい、若者はいなくなり、村が成り立たないということになってしまった。

しかし、絶えず変動する今日の文明社会の中で、これに耐えるまちづくりをしたり、生涯教育を行おうとする場合には、自分の生まれた村に一生いる人たちだけでやっていけるはずがない。やはり、世界に志をもち、若い頃の十年ぐらいは徹底的に外界で遊び回ってから戻ってくる人こそ、異文化を持ち帰り、やがて村をつくる人材になるのである。



そのための標語を考えてみたが、高齢化を明るく見せるために、「高齢」を「光齡」と書いてしまおうというものだ。観光の光と同じで、光ればいいのだから、「光齡化」が進むほどすばらしいという言い方ができるのではないかと思ったわけである。

過疎化の場合も、「過疎」の過という字がいけないので、「佳疎」としたらどうだろうか。過密で困っている近代文明は、すばらしい疎になることが必要だから、「光齡化」「佳疎化」が進むほど、まちはよくなるという認識のもとに、改めて議論し直して下さいということを、最近いろいろなところで申し上げている。

若者の流出という言葉も、「たれ流し」のイメージが強いので、「流」というのを「竜」に変えたらどうか。そうすれば、村の若者が世界へ飛び立ち、やがて異文化を身につけて帰り、将来は村の指導者になるに違いないと思うことができるからだ。

地域の活動が原点となって全国土ができていく

塩の道沿線の十二市三十六町村が生涯学習の場として、生まれてから亡くなるまでの間の、いろいろな人生を語り合っているような環境になればすばらしいことだ。そうなれば、これを見るために日本中あるいは世界中の人が、観光という名のもとに集まるようになる。つまり、モデル地域としての塩の道ルートができたなら、こんなすばらしいことはないというように考えるわけだ。

これからの日本というのは、これまでお話ししたように、地域の活動が原点となって全国土ができていく、という発想に変えることが重要だ。これは今度の新しい国土計画の基本的なコンセプトでもある。したがって、塩の道会議のメンバーの方々には、おおいに意見交換をしていただきたいと思うのである。



【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

第1回「塩の道」会議報告書、1996年3月、掛川市商工会議所

資料番号：199603007

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199603007&sub=>

地域社会の現代的発見

下河辺淳

これまで地域社会とは、国の一部を占める地域で、都市または農村に区別されることで理解されていた。しかし、今日では、地域社会は、国境を超えた世界との関係でその存在を考えるようになってきている。しかも都市と農村という区別はもはや過去のものとなりつつある。人間が居住する地域では、おもな産業が農業であれば農村と言ってもよいかもしれない。しかし地域社会の問題は、その地域の主な産業で考えることを超えて、人間の居住環境として考える時代である。つまり人間と人間との関係、人間と自然との関係を考え、居住環境を共有する人々のコミュニティが地域社会である。

産業革命以後の 20 世紀では、すべての人々が都市化の進む中で暮らしを考えた。都市化は人口の流動と集中を促進し、世界的に大都市化が進展している。都市化とは脱農村、脱自然、脱季節であり、超高密度居住の空間を構成する勢いを持っていた。さらに、クルマ社会の形成が都市化をより厳しい現実には追い込むこととなった。

20 世紀末を迎えて、20 世紀文明と言われる都市文明、科学技術文明について、その偉大な業績を評価することとともに、より大きな副作用のために否定的な考え方が、より多くの人々の中に広がってきている。

21 世紀では、都市化工業化による近代化が否定され、大都市が衰退して、人間と人間のかかわり合い、人間と自然のかかわり合いにどこまでもこだわった新しい居住空間の創造が求められるだろう。普遍性と特異性に彩られた人間の集団と自然環境により、個性的な地域社会が生まれ、地域社会相互が利害の障壁を超えて交流するネットワーク社会が形成される。人間が海から育ち、森に棲み、農耕革命による農村を開発し、産業革命による都市を建設して集団居住した人類の歴史の流れに沿って、次の時代に高次の知的環境と豊かな自然環境の組合せにより、新しい居住環境を持った地域社会が出現することに無限の夢を感じることができる。



【下河辺淳アーカイブス所蔵】

CDC レポート NO.26、1992 年 10 月、(財) 地域社会計画センター

資料番号：199210001

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199210001&sub=>

Reference Date Clipping

本号では、「下河辺淳アーカイヴス」所蔵資料の中から、下河辺氏が「地方」をテーマに行った講演録、あるいは取材記事等を中心に、その一部について書誌情報を掲載します。

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
196300001	地域開発と工場立地		1963年
196401001	新産業都市について	CONSULTANT NO.7	1964年01月10日
196403001	新産業都市の意義	住民の生活と新産業都市：新産業都市関係道県社会開発セミナー報告書	1964年03月25日
196412001	地域開発の諸問題	季刊国土 VOL.13 NO.2	1964年12月
196412002	地域開発政策のビジョン		1964年12月10日
196512001	十人に一台以上へー二十年後の自動車普及 [あすの四国開発：2500ドル経済のもとで (1)]	愛媛新聞 19651216/8	1965年12月16日
196512002	大牧畜業を起こすーさけられぬ都市の整理 [あすの四国開発：2500ドル経済のもとで (2)]	愛媛新聞 19651217/8	1965年12月17日
196512003	清い空気・水を保護ー20年後のビジョンに [あすの四国開発：2500ドル経済のもとで (3)]	愛媛新聞 19651218/8	1965年12月18日
196512004	欠かせぬ拠点育成ー低密度高開発への条件 [あすの四国開発：2500ドル経済のもとで (4)]	愛媛新聞 19651219/8	1965年12月19日
196600001	地域開発の諸問題		1966年
196600002	地方開発の問題点と市町村計画		1966年
196608002	地域開発政策の今後の方向	地域開発 NO.23	1966年08月01日
196706003	都市と農村の新関係		1967年06月06日
197012001	地域開発考	自治研修 NO.124	1970年12月10日
197102003	全国山村青年会議における講演		1971年02月24日
197107007	岩手の開発と展望		1971年07月20日
197108001	神奈川県における地域開発の展望		1971年08月11日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
197110002	三たん地方における開発の基本的方向について	三たん情報	1971年10月
197112002	首都圏開発の展望	茨城自治 NO.160・161(合併号)	1971年12月21日
197112004	人と自然の調和 [脱皮への提言―矢作川流域開発研シンポジウムから]	中日新聞 19711223/12	1971年12月23日
197411002	地方自治計画へのヒント	季刊国土 VOL.24 NO.2	1974年11月15日
197804002	第三次全国総合開発計画と東北	東北経連月報 増刊号	1978年04月10日
197804004	地域の意向映す―三全総 人口Uターンに備え	山形新聞 19780416/3	1978年04月16日
197804009	急増する九州の就業人口―‘雇用創出’呼びかけ	西日本新聞 19780408/7	1978年04月08日
197805001	国土の総合開発について	地方銀行	1978年05月10日
197805004	第三次全国総合開発計画と東北	青葉 NO.48	1978年05月06日
197806002	第三次全国総合開発計画と離島振興について		1978年06月05日
197807001	三全総と日本海時代―明日の新潟の繁栄のために		1978年07月25日
197807003	今後の地域開発上の課題	北陸経済研究 NO.2	1978年07月25日
197809001	1980年代の地域経済の展望と課題―基調報告要旨		1978年09月18日
197900001	二十一世紀にむけての田園都市構想		1979年
197904008	地域の特色を強調 [80年代のわが郷土]	月刊自由民主 NO.314	1979年04月15日
197906006	人口、地方都市へ流入―生産、生活、環境の調和を [読売セミナー／三全総とあすの浜松(上)]	読売新聞 19790619	1979年06月19日
197906007	国際都市への期待―施設整備、民間資金も活用 [読売セミナー／三全総とあすの浜松(中)]	読売新聞 19790620	1979年06月20日
197906008	輸送対策は見直し―魅力あふれる地方都市に [読売セミナー／三全総とあすの浜松(下)]	読売新聞 19790621	1979年06月21日
197906009	‘定住圏構想’と地方都市―自然環境の保全図れ 地域の特性生かして	東海日日新聞 19790607/1	1979年06月07日
197906011	‘あすの浜松’へ具体策:‘市の頭脳’も感銘、読売セミナー―下河辺国土庁次官が提言	読売新聞 19790616/20	1979年06月16日
197906015	個性豊かに‘定住圏’―知識と人材生かして	山形新聞 19790612/8	1979年06月12日
198002002	これからの地域振興の方向		1980年02月18日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
198003002	地域社会の国際化と開港		1980年03月
198007004	'80年代の地域問題	明日の中部 VOL.58 初夏号	1980年07月
198008001	第二次沖縄振興開発計画策定に向けて		1980年08月
198010002	定住構想と地域開発		1980年10月25日
198010003	これからの地域振興の方向（上）	信州自治 VOL.33 NO.10	1980年10月15日
198010006	三全総と流域圏 [中部の明日を考える：住みよい郷土]	中日新聞 19801006/9	1980年10月06日
198010007	積雪寒冷地を見直せ－高齢化、国際化 対応できる実力を	十勝毎日新聞 19801026/1	1980年10月26日
198011001	これからの地域振興の方向（下）	信州自治 VOL.33 NO.11	1980年11月15日
198109005	国際・分散・情報化の波洗う	北海道新聞 19810912/2	1981年09月12日
198111003	和歌山の発展と研究開発機関の役割	シンポジウム等一覧	1981年11月21日
198204010	激動の20世紀に学ぶ	中國新聞 19820426/18	1982年04月26日
198212009	沖縄の未来を考える－南の玄関口めざせ	琉球新報 19821207	1982年12月07日
198212010	国際感覚が必要に－空港をもっと整備を	沖縄タイムス 19821207	1982年12月07日
198301005	視点：地方が「けん引車」に [テクノ時代の九州]	西日本新聞 19830103/12	1983年01月03日
198303007	沖縄の未来を考える	沖縄の未来を考える：沖縄復帰10周年記念シンポジウム報告書	1983年03月
198304001	これからの地域開発	国土計画研究交流会だより NO.6	1983年04月
198311001	今後の地域づくりについて	むらづくり：県民シンポジウム報告－これからの群馬の農村を考える	1983年11月10日
198405008	雪あればこそその文化	読売新聞 19840512/12	1984年05月12日
198406012	「関西は考える」シリーズを終えて	月刊NIRA 1984年6月号 「NIRA フォーラム関西報告「関西は考える－21世紀に何をすべきか」	1984年06月08日
198408002	21世紀における奈良の役割	まちづくり瓦版 NO.1	1984年08月15日
198410002	地域活性化とイベント	地域活性化とイベント：昭和59年度全国余暇行政研究協議会研修会記録	1984年10月29日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
198410010	四国を創造の場にー高齢化社会のモデル期待	四国新聞 19841012/2	1984年10月12日
198410011	提論：21世紀の日本と九州	西日本新聞 19841023/11	1984年10月23日
198410012	人間・都市・文明 [明日の四国を考える高松会議'84 紙上シンポジウム(2)]	四国新聞 19841031/14-15	1984年10月31日
198412005	人間・都市・文明 [明日の四国を考える(IV)]	地域開発 NO.243	1984年12月01日
198500002	地方の活性化	日本の進路を語るー昭和60年度夏期研修会講演記録集	1985年
198502001	21世紀の近畿への期待		1985年02月
198503004	人間・都市・文明	明日の四国 4: 高松会議'84の記録	1985年03月25日
198504006	国際化時代の町づくり	国際交流に果たす名古屋の役割ー国際研修と交流のあり方	1985年04月30日
198505001	21世紀はどんな時代か [第五章 21世紀の日本と北海道]	北海道 21世紀ー大型プロジェクトの可能性	1985年05月17日
198506012	風土と学問融和を [21世紀を考える(上)]	福井新聞 19850630/21	1985年06月30日
198508002	コスモポリス構想への期待と課題	工業 NO.451	1985年08月01日
198508006	国土と河川		1985年08月06日
198510006	世界の中の京都	'85 比叡会議報告書 「世界文明と京都ー京都は世界のために何ができるか」	1985年10月22日
198512005	90年代以降の地域形成戦略のあり方	関西文化学術研究都市建設事業化検討調査講演録要旨	1985年12月
198600003	地域づくりの新しい展開		1986年
198605003	北陸の未来像ー21世紀に向けてどうあるべきか	会報 特別号	1986年05月
198606005	関西文化学術研究都市の理念と今後の推進方策	経済人 VOL.40 NO.6	1986年06月01日
198607006	総合討論「次回への活力を蓄積」	'86 北海道会議・札幌フォーラム「世界の中の日本、日本の中の北海道-われわれは、いま何ができるか」	1986年07月05日
198608007	関西文化学術研究都市について		1986年08月14日
198609020	「21世紀に向けての地方都市」 記念講演の要旨 [グリーンサミット]	熊本日日新聞 19860912	1986年09月12日
198610008	東京 300km 圏と富山の活性化	シンポジウム 富山・東京論ー富山と東京 300km 圏構想	1986年10月20日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
198703001	街づくりの新しい流れについて	川崎新都心街づくり財団設立記念シンポジウム：かわさき新都心の街づくりを考える：報告書	1987年03月
198703002	四季の風景が見える街づくり [かわさきネットワーク (1)]	クォーターリーかわさき NO.12	1987年03月
198703004	21世紀に向けての地方都市	熊本グリーンサミット会議報告書	1987年03月
198704002	地方都市の魅力	石川自治と教育 NO.409	1987年04月01日
198706003	新文化首都の基本構想に関連して	経済人 VOL.41 NO.6	1987年06月01日
198707002	東北開発の新展開	東北開発研究 VOL.22 NO.2	1987年07月31日
198707003	第1回シンポジウム [茨城県東京経済人倶楽部第3回総会・理事会]	茨城県東京経済人倶楽部会報	1987年07月
198707006	コメント ['87北海道会議・トマムフォーラム]	'87北海道会議・トマムフォーラム「21世紀へ向けてー北海道は何を持って生きるか」	1987年07月10日
198709003	基調講演 I ['87第一回東北会議「いまなぜ東北かーすてるもの、いかすもの」]	第一回東北会議「いまなぜ東北かーすてるもの、いかすもの」	1987年09月
198710010	関西文化首都圏構想について	21世紀への挑戦ー関西文化学術研究都市 (関西文化学術研究都市推進機構主催講演会講演録)	1987年10月15日
198711016	シンポジウムの意義、ポイント [尼崎・川崎まちづくりシンポジウム]	尼崎・川崎まちづくりシンポジウム「都市の再生～まち・ひと・魅力」	1987年11月20日
198803008	基調提言 ['88新千歳空港国際化シンポジウム]	'88新千歳空港国際化シンポジウム「新千歳空港国際エアカーゴ基地ー地域の選択・国際化への挑戦」	1988年03月31日
198804003	第2国土軸と福島	アクション 21c 福島フォーラム「未来県ふくしまの新しい役割と総合開発」	1988年04月28日
198806006	国際化と地域社会	地方シンクタンク協議会特別シンポジウム：基調講演「国際化と地域社会」	1988年06月17日
198806008	関西文化首都圏構想について	京阪奈 88：関西文化学術研究都市要覧 VOL.1	1988年06月23日
198807005	基調講演 II ['88北海道会議・鹿部フォーラム]	北海道・人・歴史・文化ーその生い立ちと北海道の将来	1988年07月15日
198807010	まちづくりの新しい流れについて	大都市周辺における地域社会形成のあり方に関する実証的研究	1988年07月25日
198807011	千歳になぜ、国際空港が必要か [特集：第二国土軸、そして都市・交通 パート1]	航空と文化 No.28	1988年07月25日
198807012	第二国土軸と福島 [特集：第二国土軸、そして都市・交通 パート2]	航空と文化 No.28	1988年07月25日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
198809003	21世紀へ向けて筑波研究学園都市を考える	21世紀に向けて筑波研究学園都市を考えるー筑波研究学園都市建設25周年記念講演：講演録	1988年09月09日
198810001	国際化新時代と地方の発展	首都問題を探るー首都機能移転問題等講演会要旨	1988年10月
198810005	東北の未来ーそれは日本の未来	第36回東北地区会員大会報告書	1988年10月10日
198901006	21世紀日本に向けて地方の発進ー市町村が切り開くまちづくりの新地平	地域の自立・共生が切り開く地方新時代ー地方新時代・市町村シンポジウム報告書	1989年01月
198902004	関西の未来像ー次の75年	支店開設75周年記念講演録	1989年02月20日
198903002	関西文化学術研究都市の将来	すばるフォーラム講演録	1989年03月
198905004	基調講演 [瀬戸内経済圏構想]	シンポジウム 瀬戸内経済圏構想	1989年05月01日
199002002	九州の未来像	TMC会報 VOL.17	1990年02月28日
199005003	日中の基本的政策課題	NIRA ニュース NO.5 May 1990	1990年05月05日
199006006	地域政策の諸課題	NIRA 政策研究 1990 VOL.3 NO.6 「地域政策の諸課題ー日中地域政策シンポジウムより」	1990年06月
199010005	下河辺淳氏基調講演ーみやぎ21世紀フォーラムにて	下河辺淳氏基調講演ーみやぎ21世紀フォーラムにて	1990年10月26日
199107005	21世紀の世界を拓く地域の決断	(社)地域問題研究所創立20周年記念誌(第一集)	1991年07月31日
199110001	地域活性化の新しいトレンド	21世紀にむけての地域活性化戦略ー地域活性化研究会中間報告	1991年10月
199202003	総括講演 [国際雪国フォーラム イン ながおか「真の豊かさを考えるー雪国から提案する21世紀」]	真の豊かさを考えるー雪国から提案する21世紀：国際雪国フォーラム イン ながおか 報告書	1992年02月15日
199204004	第1セグメント「多極分散の思想とその推移」	第1期大阪テレコムチャンス(OTC)フォーラム 第4回議事録	1992年04月22日
199204007	第2セグメント「関西文化圏のビジョン」	第1期大阪テレコムチャンス(OTC)フォーラム 第4回議事録	1992年04月22日
199204008	第3セグメント「関西の時代に期待するもの」	第1期大阪テレコムチャンス(OTC)フォーラム 第4回議事録	1992年04月22日
199208005	基調講演 [地方シンクタンクフォーラム「地域の情報化の方策ー21世紀の国土構造への課題として」]	NIRA 政策研究 1992 VOL.5 NO.8 「地域情報化の方策」	1992年08月25日
199208007	地方シンクタンクフォーラム「地域の情報化の方策」	NIRA ニュース NO.8 August 1992	1992年08月05日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
199210002	世界経済の動向と長崎の未来	情報の親和 R&I NO.9	1992年10月31日
199210003	街づくりの新しい流れ—新都心文化の創造を	都市と農村を考える—豊かな環境を求めて	1992年10月16日
199212009	東日本軸は脱工業化をめざせ [マイク]	北海道新聞 19921204/8	1992年12月04日
199300001	21世紀の社会をリードする北海道東北地域—ほくとう日本の将来と国際経済交流	For Symbiotic Future	1993年
199302001	ほくとう日本の将来と国際経済交流	NETT NO.3	1993年02月
199303003	21世紀を展望する九州の活性化	地域経済研究センター年報 NO.4	1993年03月31日
199303011	ほくとう日本の将来と国際経済交流	ほくとう総研 地域国際化シンポジウム〈報告書〉	1993年03月
199305019	堺にかける夢	Urban VOL.1	1993年05月
199307004	21世紀に向けた地域都市づくりの視点		1993年07月01日
199308002	国土構造と地域振興	地域活性化講演会 北上中部圏域の更なる飛躍を期して	1993年08月30日
199310002	バブル崩壊とシンクタンクの役割	'93 日本シンクタンク協議会シンポジウム バブル崩壊後の地域経済：講演録	1993年10月14日
199310004	地域がイキイキしはじめる	ライフサイエンス VOL.20 NO.10	1993年10月01日
199311004	東京一極集中と森林化社会	東京のなかま NO.19	1993年11月
199312004	生活大国と九州の未来	'93九州フォーラム大分会議報告書「あすの九州をもとめて—生活大国への道」	1993年12月
199403005	環日本海時代を迎えて	第26回すばるフォーラム講演録 環日本海時代を迎えて—日本海国土軸の形成	1994年03月24日
199407004	地域特性を生かしたグランドデザイン—意図をもつことが地方の時代へのバイタリティー	TECHNO NEWS TOYAMA NO.43	1994年07月25日
199410008	県北臨海都市の明るい未来		1994年10月21日
199503008	地域特性を生かしたグランドデザイン—意図をもつことが地方の時代へのバイタリティー	OFFER 06	1995年03月20日
199510001	世界の中の北海道、北海道と日本	'95北海道会議・札幌フォーラムII「世界の中の日本、日本の中の北海道—われわれはいま何をすべきか—」	1995年10月06日
199510027	「塩の道」会議・基調講演 下河辺淳氏(元国土庁事務次官)—光る情報、いかに提供	静岡新聞 19951021/18	1995年10月21日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
199603007	塩と焼鯖とお米のルート	第1回「塩の道」会議報告書	1996年03月31日
199603018	アジアの中の沖縄の未来		1996年03月06日
199603019	沖縄を交流圏の中心にー特別講演「アジアの中の沖縄の未来」		1996年03月
199606004	浦港いばらきの21世紀に向けて	浦港いばらきの21世紀に向けて 下河辺淳氏講演会	1996年06月10日
199606009	アジアの中の沖縄の未来	対米協ニュース NO.1	1996年06月
199610010	感想とコメント [第1回「草原懇話会」]	第1回「草原懇話会」の討論・ 議事録	1996年10月29日
199611002	北海道と沖縄の新しい時代に向けて	第4回「北海道教育・研究フォー ラム」レポート	1996年11月21日
199701001	宮崎県における今後のリゾート展開に期待すること	宮崎政策研究 NO.3「宮崎県に おける今後のリゾート展開に期 待すること」	1997年01月
199701008	地域政策とシンクタンクの役割	設立15周年記念講演会記録「地 域政策とシンクタンクの役割」	1997年01月
199703002	おましかね総括ー千年と宇宙	フォッサマグナの叫びーもうひ とつのくにづくり	1997年03月
199706020	ゆめ博ー「21世紀の東北の都市像」フォー ラムの講演と発言の要旨	河北新報 19970619	1997年06月19日
199706033	アジア太平洋地域と沖縄の課題	沖縄タイムス 19970620/2	1997年06月20日
199709005	西日本は限界 東日本が軸に [「気概の復 活と創生」シンポ: 2氏の講演要旨]	河北新報 19970914/3	1997年09月14日
199710001	国土ビジョンに見る気概ー21世紀は小都 市の時代	河北新報 19971016/17	1997年10月16日
199804011	二十一世紀このくにのかたち		1998年04月18日
199805011	21世紀 沖縄の将来ビジョンへの提言ー沖 縄の持続可能な開発に向けて 下河辺淳 講演会	沖縄・南の国際交流拠点事業調査 調査報告書	1998年05月01日
199807010	21世紀の国土のグランドデザインと東北	(社)東北経済連合会地域開発特 別講演会 講演録	1998年07月10日
199903006	水系とともに生きるためにー水行政の改 革	新しい北上川・新しい流域社会の 創造	1999年03月
199907008	南アルプスに残すメッセージ	第3回日本上流文化圏会議 「1000年の学校」in 南アルプス	1999年07月17日
200003004	21世紀のO-BAYをデザインするー世界 都市化めざせ	日本経済新聞 20000302E/14	2000年03月02日
200007001	若者こそ行動をー21世紀はアジア・太平洋 の時代	西日本新聞 20000706/12	2000年07月06日
200007006	中台との蓬莱経済圏をー21世紀フォーラ ム	琉球新報 20000702/1	2000年07月02日

資料番号	タイトル	出版物	発行年月日
200007008	アジア・太平洋新国土軸構想 連携と発展 —下河辺淳氏	琉球新報 20000707/12	2000年07月07日
200007009	質疑応答 下河辺氏—日本の‘扶養家族’で いいのか 解決していくのは若者	琉球新報 20000707/12	2000年07月07日
200010001	茨城の将来	茨城県東京経済人倶楽部会報 15周年記念号 NO.27	2000年10月
200107001	二十一世紀の地域づくり [大学院新設記 念行事から—東洋大学板倉キャンパス]	生産性新聞 20010725/8	2001年07月25日
200203007	地域の文化的遺産を生かしたまちおこし —世界に誇れる文化創造を	琉球新報 20020328/17	2002年03月28日
200409009	1980年代 (2) 沖縄の未来を考える [第4 章 「下河辺淳アーカイヴ」から時代を 読む]	NIRA 政策研究 2004 VOL.17 NO.9 「次代への提唱—『下河 辺淳アーカイヴ』から時代を読む」	2004年09月25日



Archives News

—「下河辺淳 沖縄関係資料」を沖縄県公文書館に寄贈しました—

「下河辺淳 沖縄関係資料」は、1996〔平成8〕年の日米両政府による普天間基地返還合意に際し、下河辺氏が当時の橋本龍太郎内閣総理大臣、大田昌秀沖縄県知事より要請を受け、双方の調整役を担った時期の資料です。「この資料は沖縄のために役立ててほしい」という下河辺氏の意向をふまえ、将来的に沖縄県のしかるべき公的機関等に移管して県民ならびに県政に役立てることを前提に、2003〔平成15〕年より約10年にわたり江上能義氏（早稲田大学政治経済学術院教授）にいったん寄託されました。その後、江上氏の同資料に関する研究が終了したことを受けて、2013〔平成25〕年1月に下河辺氏より当研究所の「下河辺淳アーカイヴス」に寄贈されました。

以来、資料を整理し目録を作成するとともに、沖縄県への移管を目指して、関係各位のご協力のもと調整を進めてきました。その経緯や下河辺氏と沖縄とのかかわりについては、アーカイヴスレポート Vol.10「下河辺淳所蔵資料からみる『沖縄』」にまとめましたので、ぜひご一読ください。

2015〔平成27〕年秋、沖縄県公文書館より受け入れが可能であるとの連絡を受け、当該資料についての説明や内容確認、具体的な寄贈の日程などについて話し合いを行った結果、2016〔平成28〕年6月22日を寄贈日とすることを決定しました。これに伴い、公文書館で贈呈式が執り行われ、当研究所業務執行理事の阿部和彦より館長の真栄城香代子氏に資料の目録が手渡されました。またマスコミ各社も取材に訪れ、その内容が取り上げられました。



阿部理事より真栄城館長（右）に目録を贈呈



沖縄県公文書館

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/>

贈呈式では、下河辺氏より沖縄県公文書館ならびに関係者に宛てた下記のメッセージが紹介されました。

【下河辺淳氏からのメッセージ】

初めに、今回の寄贈にあたり、沖縄県公文書館をはじめ、ご関係者の皆様に対してお礼を申し上げます。

私が初めて沖縄にまいりましたのは、昭和44年のことで、経済企画庁総合開発局の調査官として琉球政府に派遣され、そのとき屋良朝苗主席と面談させていただきました。昭和47年の沖縄復帰前後にも、何度となく沖縄を訪問する機会がありました。琉球政府の長期経済開発計画の策定などもお手伝いをさせていただき、職員の皆さんと語り合ったことなども、懐かしく思い出しています。

その後国土庁の仕事が多忙になり、訪れる機会は少なくなりましたが、西銘順治さんとは親しくさせていただき、沖縄県の第二次振興開発計画をつくるということで、再び県庁の皆さんとお話し合いをする機会がありました。

平成8年に橋本内閣が誕生しましたが、当時の内閣と沖縄県の双方から調整役を引き受けてくれないかという要請がありました。沖縄には屋良さんの時代からずっとかかわってきましたから、個人的に沖縄の立場に立ったつもりでお引き受けをしました。今回寄贈される資料は、その当時のものです。沖縄のために役立ててほしいと願っていましたが、皆さんのご理解でそれが叶ったことに感謝しています。

沖縄に対してはいろいろな提案があつてしかるべきですが、私が提案したいのは、万国津梁の鐘に刻まれた銘文、これこそが沖縄の精神だと思っています。

15世紀の沖縄は、アジアの情報センターでした。万国津梁の精神のもとで、沖縄がこれからもその歩みを進めていくことに期待しています。

平成28年6月22日 慰霊の日に寄せて

下河辺 淳

今回の贈呈式ならびに本資料に関する各社の取材記事について、下記に掲載させていただきます（日付順不同、URLリンク先については2016年6月27日現在）。

<p>梶山氏の書簡 沖縄県に寄贈 普天間返還関連 米軍普天間飛行場 (沖縄県宜野湾市)の 返還に米側と合意した 故橋本龍太郎元首相の 下で沖縄問題を担当し た故梶山静六元官房長 官が1998年、当時 政府の「密使」とされ た下河辺淳・元国土事 務次官(92)に宛てた書 簡など、沖縄関係資料 が22日、県公文書館に 寄贈された。</p>	<p>た「下河辺メモ」と呼 ばれる文書など、「下 河辺淳アーカイブス」 (東京都港区)が管理 してきたメモ類や刊行 物約1000点。下河 辺氏は72年の本土復帰 前から沖縄問題に関わ り、橋本内閣では当時 の革新県政との調整役 を担った。</p>
<p>資料はほかに、普天 間返還決定5カ月後の 96年9月に閣議決定さ れた沖縄問題について の首相談話の基になっ</p>	<p>贈呈式では「沖縄に はすっとかかわってき たから(調整役は)沖 縄の立場に立ったつも りで引き受けた。資料 は沖縄のために役立 てほしい」との下河辺 氏のメッセージが代読 された。資料は来年5 月、一般公開される。</p>
<p>【鈴木美穂】</p>	
<p>毎日新聞 朝刊 2016年6月23日</p>	

本土の反発恐れ「辺野古以外ない」 故梶山静六氏が書簡

2016年6月24日 06:05 普天間移設問題・辺野古新基地 普天間移設問題 政治 注目

Twitter 43 G+ 1 B! 4



本土の反対運動を懸念し、名護市のキャンプ・シュワブ沖に代替施設を建設すべきとの考えが述べられた梶山静六氏の手紙



梶山静六 元官房長官

米軍普天間飛行場の返還を米側と合意した故橋本龍太郎元首相の下で官房長官を務めた故梶山静六氏が1998年、本土での反対運動を懸念し、普天間の移設先は名護市辺野古以外ないと書簡に記していたことが分かった。国は「辺野古が唯一」の理由として地理的優位性を挙げていたが、実際は本土の反発を恐れて沖縄に押し付けるという国内の政治的な理由だったことが明るみに出た。

▶ 神奈川県議「基地反対派はキチガイ」「沖縄の新聞つづれる」

書簡は、梶山氏から橋本氏の密使として国と沖縄を仲介した元国土庁事務次官の下河辺淳氏に当てた手紙。比嘉鉄也名護市長が住民投票の結果を覆して基地を受け入れ辞任、98年2月に岸本建男氏が当選した直後に書かれたとみられる。

梶山氏は、主センブ・シュワブ沖以外で移設候補地を探せば、「必ず本土の反対勢力が組織的に住民投票運動を起こすことが予想される」と本土の反発を懸念。「名護市に基地を求め続けるよりほかはないと思う」とつづり、辺野古以外の選択肢はないとの考えを記している。

書簡を分析した沖縄国際大の前泊博盛教授は、辺野古でなければならぬ理由について、「地理的優位性ではなく、沖縄以外が受け入れてくれないからだとこのことを梶山さんは分かっていたのだろう」と指摘。

中谷元・防衛相や森本敏元防衛相が以前、政治的理由で沖縄以外への移設は困難だとこの認識を示したことに触れ、「20年前から国は同じ認識で、それこそが国の本音だ」と述べた。

書簡は、下河辺氏の資料などを管理する「下河辺アーカイブス」が保管していた。アーカイブスは22日、この書簡を含め下河辺氏の沖縄関連資料約165点を県公文書館へ寄贈した。

公文書館はデータベース化を進め、早ければ来年5月に一般公開する予定。

沖縄タイムスプラス 2016年6月24日

<http://www.okinawatimes.co.jp/article.php?id=174669>

時事ドットコムニュース > 政治 > 普天間移設、本土の反対懸念＝梶山元官房長官が書簡で

Twitter Facebook G+ 小 中 大

普天間移設、本土の反対懸念＝梶山元官房長官が書簡で

米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）をめぐる、日米両政府が返還で合意した際に官房長官だった梶山静六氏（故人）が直筆の書簡で、本土の反対運動を理由に名護市での代替基地建設を追求するはかないと記していることが21日、分かった。書簡は22日、沖縄県公文書館に寄贈される。

日米両政府は1996年、県内移設の条件付きで普天間返還で合意。97年に名護市で移設の是非に関する住民投票が行われ、反対票が過半数を占めた。比嘉鉄也市長（当時）は移設受け入れと辞意を表明。梶山氏の書簡は98年、橋本内閣と大田昌秀知事（同）との仲介役を務めた下河辺淳元国土庁事務次官に宛てて出された。

この中で梶山氏は、名護市辺野古の米軍キャンプ・シュワブ沖以外に候補地を求めることは「必ず本土の反対勢力が組織的に住民投票運動を起こすことが予想される」と懸念。「岸本（建男）現市長が『受け入れ』のまま市の態度を凍結するとしている名護市に基地を求め続けるよりほかはない」としている。

書簡は財団法人「下河辺淳アーカイブス」（東京都港区）が所蔵していた。県公文書館の福地洋子主任専門員は「当時の米軍基地問題について、国側の考えが分かる貴重な資料だ」と評価した。（2016/06/21-18:36）
【政治記事一覧へ】 【アクセスランキング】

時事ドットコムニュース 2016年6月21日

<http://www.jiji.com/jc/article?k=2016062100739&g=pol>

QAB 琉球朝日放送 報道制作部

月～水 謝花 尚・中川 晃 木・金 泉 輝 栢 望・比嘉 裕代
月曜～金曜 夕方 6時30分より

2016年6月22日 18時31分

辺野古唯一の背景は「本土の反対運動」か

6:37 元官房 下河辺資料が語るもの 辺野古の理由は「本土」への配慮か

手紙 「シュワブ沖以外に候補地を求めれば 本土の反対勢力が住民投票運動を起こす」

「普天間基地の移設先は、辺野古が唯一の選択肢だ」これまで何度も政府が繰り返してきた言葉です。しかし、その理由が本土での反対運動を懸念したものであったとしたら・・・

それを裏付ける重要な文書が6月22日県公文書館に寄贈されました。

およそ18年前に書かれた手紙。

そこには、普天間基地の移設先について「シュワブ沖以外に候補地を求めることは必ず本土の反対勢力が組織的に住民投票運動を起こすことが予想される」「名護市に基地を求め続けるよりほかはないと思う」と書かれています。

手紙を書いたのは、元官房長官の梶山静六さんです。手紙を受け取り、資料を公開したのは元官房長で、1996年の普天間返還交渉の際と政府の間の調整役を務めた下河辺淳さんです。

普天間の県内移設の理由が、政府が主張する抑止力ではなく、本土の反対運動への懸念だったことを浮き彫りにするこの手紙のほか、普天間交渉の舞台裏について下河辺さんの証言を書きとめた資料など、約1000点が23日の献霊の日を前に、22日、東京の研究機関から、県公文書館に寄贈されました。

贈呈式では、現在92歳で、東京の福祉施設で暮らす下河辺さんの手紙が紹介されました。

下河辺さん手紙「沖縄には屋良さんの時代からずっと関わってきましたから、個人的に沖縄の立場に立ったつもりで（普天間返還交渉の調整役を）お引き受けをしました。」「万国津梁の鐘に刻まれた銘文。これこそが沖縄の精神だと思っています。」「沖縄がこれからもその歩みを進めていくことに期待しております。」

資料は、2017年5月をめどに一般公開されるということです。

琉球朝日放送 2016年6月22日

<http://www.qab.co.jp/news/2016062281151.html>

橋本総理と大田知事の仲介役 下河辺氏の資料寄贈

1996年に日米両政府が普天間基地の返還合意を発表したあと、当時の橋本総理と大田知事の仲介役をつとめた元官僚の下河辺淳さんが保管していた資料およそ1000点が22日、県公文書館に寄贈されました。

今回寄贈された資料のなかには、1996年の普天間基地の返還合意当時、官房長官を務めていた梶山静六さんが下河辺さんに宛てた書簡も含まれています。

書簡には、名護市辺野古のキャンパスワフ沖以外に普天間基地の移設候補地を求めれば「本土の反対勢力が住民運動を起こす」として「名護市に基地を求め続けるほかない」などという記述もあり、政治的な理由によって移設先が決まらねばならぬと訴えていることが読み取れます。

このほかにも、沖縄の様々な問題を検証するシンクタンクによるプロジェクトの記録や下河辺さんによる沖縄に関する直筆のメモなども寄贈されました。

今回の資料の寄贈は現在、財団法人で特別顧問を務める下河辺さんが「沖縄のために役立ててほしい」と希望したことから実現したということで、来年5月ごろに一般公開される予定です。



梶山静六元官房長官から下河辺氏に宛てた書簡

琉球放送 2016年6月22日 (動画あり)

http://www.rbc.co.jp/news_rbc/%E6%A9%8B%E6%9C%A%E7%B7%8F%E7%90%86%E3%81%A8%E5%A4%A7%E7%94%B0%E7%9F%A5%E4%BA%8B%E3%81%A%E4%BB%B2%E4%BB%8B%E5%BD%B9%E3%80%80%E4%B8%8B%E6%B2%B3%E8%BE%BA%E6%B0%8F%E3%81%A%E8%B3%87%E6%96%99%E5%AF%84/

本土の反対懸念「名護よりほか無い」

普天間飛行場を巡る当時の経緯
1995年9月 沖縄県で米兵による少女暴行事件発生
96年1月 村山首相が退陣し、橋本龍太郎内閣発足。梶山静六氏が官房長官に
96年4月 旧県宮野市市の米軍普天間飛行場返還で日米合意。代議院議決などを案行
97年9月 内閣改組で梶山氏が官房長官退任
97年12月 旧県名護市への移設を盛り込んだ市で住民投票。反対が過半数で、当時の比嘉政出市長が受け入れを表明し解任
98年2月 名護市長選で比嘉氏後継の岸本勇氏が当選
このころ 橋本内閣で下河辺淳、元副土庁事務次長に梶山氏が寄贈。「名護に基地を求め続けるよりほかは無い」という趣旨の書簡が宛てられた。小泉内閣が発足
98年7月



梶山静六氏
【別紙】下河辺淳氏宛てた書簡の複製

米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の返還問題と関係した政府関係者(元副土庁事務次長)の下河辺淳氏(東京都葛飾区)が、本土の反対勢力(名護市)の移設先をめぐって、同市議員(下河辺淳)に宛てた書簡が、今回、本土の反対勢力(名護市)の移設先をめぐって、同市議員(下河辺淳)宛てに宛てられた。書簡には、名護市に基地を求め続けるほかない、などという記述もあり、政治的な理由によって移設先が決まらねばならぬと訴えていることが読み取れます。

辺野古決定 政権の本音

梶山元官房長官 98年に書簡

書簡の内容抜粋
○この内容が、名護市に基地を求め続けるほかない、などという記述もあり、政治的な理由によって移設先が決まらねばならぬと訴えていることが読み取れます。



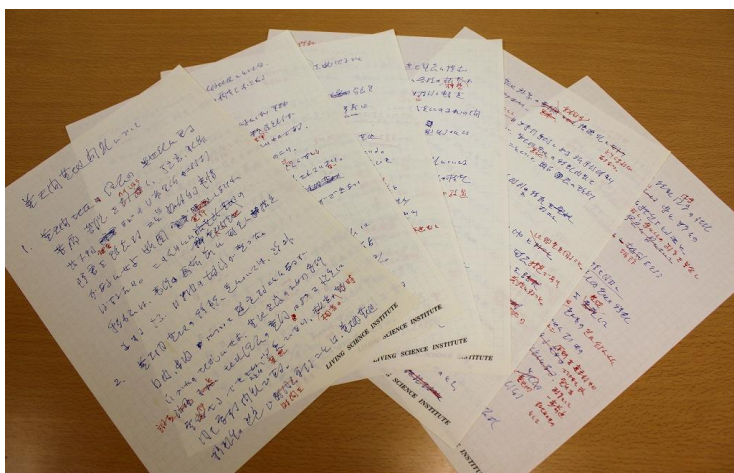
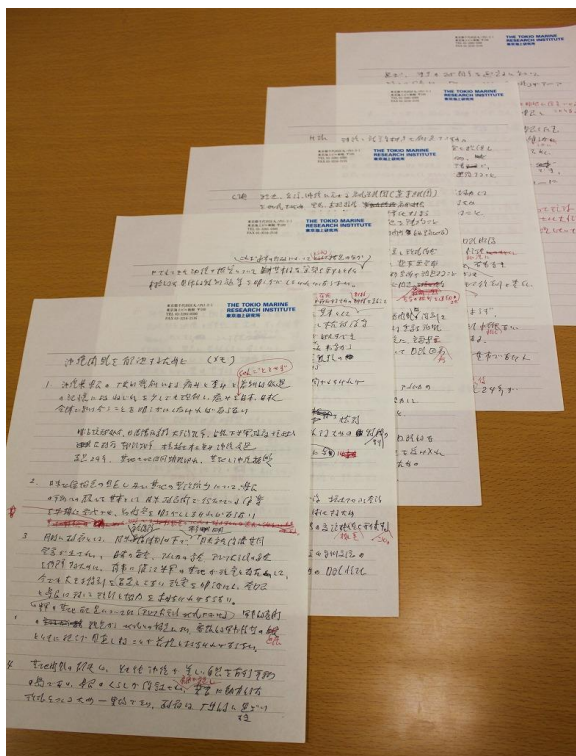
橋本内閣で官房長官として沖縄問題を担当した梶山静六氏から、政府の「国策」を務めた下河辺淳氏に宛てた書簡の複製

7年への機嫌改善を巡って、下河辺淳氏(東京都葛飾区)が、本土の反対勢力(名護市)の移設先をめぐって、同市議員(下河辺淳)宛てに宛てられた。書簡には、名護市に基地を求め続けるほかない、などという記述もあり、政治的な理由によって移設先が決まらねばならぬと訴えていることが読み取れます。

が、副都庁の東洋市の機嫌改善を巡って、下河辺淳氏(東京都葛飾区)が、本土の反対勢力(名護市)の移設先をめぐって、同市議員(下河辺淳)宛てに宛てられた。書簡には、名護市に基地を求め続けるほかない、などという記述もあり、政治的な理由によって移設先が決まらねばならぬと訴えていることが読み取れます。

琉球新報 電子版 2016年6月22日
(以下の URL からご覧ください)
<http://ryukyushimpo.jp/news/entry-302826.html>

「下河辺淳 沖縄関係資料」については、当時の内閣と沖縄県の意見を取り入れながら下河辺氏がまとめあげた「沖縄問題を解決するために（下河辺メモ）」「普天間基地問題について」「普天間基地の移転問題について」「総理の沖縄演説のポイントメモ」などの手書き原稿をはじめ、御厨貴氏（当時東京都立大学教授、現放送大学教授・東京大学先端科学技術研究センター客員教授）らによるオーラル・ヒストリー「沖縄問題同時検証プロジェクト」、江上氏による「下河辺淳氏オーラル・ヒストリー」、また沖縄県庁等で作成された公文書や各種日程表のほか、今回注目を集めた当時の官房長官を務めた梶山静六氏より下河辺氏に宛てた自筆の書簡など、貴重な資料が含まれています。



下河辺淳氏の自筆原稿（左）「沖縄問題を解決するために」（右）普天間基地問題について

沖縄県公文書館では、2017〔平成 29〕年 5 月に一般公開を予定しているとのこと。今回の寄贈にあたり、ご尽力いただいた関係各位に感謝申し上げますとともに、本資料が広く県民、県政に寄与することを期待しています。

（「下河辺淳アーカイヴス」担当アーキビスト／島津千登世）

「下河辺淳アーカイヴス」について

「下河辺淳アーカイヴス」は 2008 年 [平成 20] 1 月に、財団法人日本開発構想研究所 [現・一般財団法人日本開発構想研究所] 内に開設されました。

このアーカイヴスは、総合研究開発機構 [NIRA] 大来記念政策研究情報館の政策特殊コレクション「下河辺淳アーカイヴ」として、収集、整理、管理、公開されてきましたが、総合研究開発機構法が廃止されることになり、NIRA で同アーカイヴを管理することが困難になったため、2007 [平成 19] 年秋に、下河辺淳氏個人に移転されました。その後、下河辺氏からの申し出を受け、当研究所が「下河辺淳アーカイヴス」として引き受けることにいたしました。

下河辺氏は、戦後国土計画・国土政策の中心的役割を担い、日本の復興とその後の社会資本整備の発展に大きく寄与され、また内外の政策研究機関の育成、発展にも尽力されました。本アーカイヴスは氏の業績を顕彰し、その著作物ならびに資料、関連情報等について収集・保存・管理を行うとともに、その書誌情報を公開するものです。

アーカイヴスに保管されている下河辺氏の著作物、ならびに資料の総登録件数は 2015 [平成 27] 年 6 月現在で 8245 件 [うち公開件数は 7994 件] です。これらを発行年別、役職別 [所属先・肩書き]、資料別 [図書、逐次刊行物、自筆メモ／構想メモなど]、発表方法別 [論文、講演会、座談会、インタビューなど]、分野別に分類し、書誌情報として文献検索システムを構築しています。

今後とも下河辺氏の著作や関連資料の収集・保存・管理を積極的に行い、アーカイヴスの充実を図っていきます。

<http://www.ued.or.jp/shimokobe/>

「下河辺淳アーカイヴス」分類別内訳 [分野別]

* 公開している 7994 件について 1 件につき 2 分野まで付与してあります。したがって件数については延べ数としてあります。

国土論、国土開発・計画	1,116 件	価値観、ライフスタイル	142 件
都市、首都、東京	711 件	ジェネレーション、ジェンダー、家族	369 件
地方・地方都市、地域開発	2,181 件	情報、メディア、ネットワーク	241 件
土地、建築、住宅	161 件	科学、技術	361 件
災害、防災	752 件	文化、デザイン	173 件
経済	195 件	生活全般	192 件
企業、経営	193 件	シンクタンク	648 件
産業	178 件	政策、政治・行政	1,048 件
交通	203 件	人物、人物評	252 件
自然、環境、エネルギー	550 件	その他	81 件
国際関係、世界、民族、宗教	1,347 件		
社会論、未来論、歴史・伝統	606 件	述べ件数	11,700 件

一下河辺淳アーカイヴスからのお知らせ

[1] 「下河辺淳アーカイヴス」書誌閲覧について

閲覧をご希望の方は、事前に電話ないし e-mail にてご連絡ください。有料になりますが、できるだけコピーの便宜をお計りいたします [コピー不可の書誌があります]。

<公開時間>

平日 [月曜日～金曜日]

10:00～17:00

昼休み時間 [12:00～13:00] を除く

<所在地>

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-16-4

アーバン虎ノ門ビル 7階

一般財団法人日本開発構想研究所

<連絡先>

TEL : 03-3504-1760

e-mail : shimokobe-arch@ued.or.jp



[2] 「戦後国土計画関連資料アーカイヴス」の開設

「下河辺淳アーカイヴス」では、下河辺淳氏が財団法人国土技術研究センターに寄託されていた国土計画・国土政策関連の資料、各種文献等について、下河辺氏の許諾を得るとともに、同センターのご厚意により当アーカイヴスに収蔵しました。今回収められた全国総合開発計画や首都機能移転問題、社会資本論など多岐にわたる資料群を広く皆様にご活用いただくため、公開に向けて順次整理を進めてまいりましたが、このたびその一部を公開することといたしました。

本アーカイヴスについても、「下河辺淳アーカイヴス」と同様に上記の要領にて閲覧いただくことが可能です。

[3] 下河辺研究室

2014 [平成 26] 年 6 月をもって閉室されました。今後の下河辺淳氏へのご連絡は下記にお願いいたします。

e-mail : aoiumi@earth.ocn.ne.jp

下河辺淳アーカイブス Archives Report バックナンバー

Vol.11	2015・06	震災復興～阪神・淡路大震災 20年の教訓～	対談「震災復興～阪神・淡路大震災 20年の教訓～」 (五百旗頭真氏×御厨貴氏)	A4版 40頁
Vol.10	2014・06	下河辺淳所蔵資料からみる「沖縄」	鼎談「沖縄県政と下河辺淳氏」(吉元政矩氏×坂口一氏×上原勝則氏)	A4版 41頁
Vol.9	2013・06	戦後国土計画関連資料アーカイブスの開設		A4版 41頁
Vol.8	2011・12	「頭脳なき国家」を超えて	対談「『頭脳なき国家』を超えて」(小川和久氏×下河辺淳)	A4版 29頁
Vol.7	2011・06	38億年の生命誌—生きものとしての人間を考える	対談「38億年の生命誌—生きものとしての人間を考える」(中村桂子氏×下河辺淳)	A4版 25頁
Vol.6	2010・12	日本経済—その来し方行く末—	鼎談「日本経済—その来し方行く末」(香西泰氏×小島明氏×下河辺淳)	A4版 27頁
Vol.5	2010・06	日本列島の未来	対談「日本列島の未来」(御厨貴氏×下河辺淳)	A4版 35頁
Vol.4	2010・03	水と人のかかわり	鼎談「水と人のかかわり—流域に生きる」(青山俊樹氏×定道成美氏×下河辺淳)	A4版 27頁
Vol.3	2009・11	クルマ社会の未来	対談「クルマ社会の未来」(志田慎太郎×下河辺淳)	21頁
Vol.2	2009・07	日本の食と農を考える	対談「日本の食と農を考える」(石毛直道×下河辺淳)	21頁
Vol.1	2009・03	21世紀の日本とアメリカ	対談「21世紀の日本とアメリカ」(山本正×下河辺淳)	21頁

※Vol.1「21世紀の日本とアメリカ」を除き、若干の余部がございます。

ご希望の方は、一般財団法人日本開発構想研究所「下河辺淳アーカイブス」までご連絡下さい。

一般財団法人 日本開発構想研究所 復刊UEDレポート バックナンバー

2016・06	地方再生と土地利用計画—地方再生のための“土地利用計画法”の提言—	1会議録6論文収録[土地利用計画制度研究会、梅田勝也氏、水口俊典氏、土屋俊幸氏、養原敬氏他]	A4版 102頁
2015・06	戦後70年の国土・地域計画の変遷と今後の課題	1鼎談7論文収録[今野修平・薦田隆成・川上征雄氏鼎談、北本政行氏、梅田勝也氏、橋本武氏他]	A4版 95頁
2014・06	土地利用計画制度の再構築に向けて—人口減少社会に対応した持続可能な土地利用を考える—	7論文収録[大村謙二郎氏、交告尚史氏、高鍋剛氏、梅田勝也氏、西澤明氏他]	A4版 72頁
2013・06	大学の国際化とグローバル人材の育成	5論文収録[吉崎誠氏、森田典正氏、南一誠氏、藤井敏信氏、角方正幸氏他]	A4版 54頁
2012・06	大震災後の国づくり、地域づくり	7論文収録[大和田哲生氏、橋本拓哉氏、中山高樹し、今野修平氏他]	A4版 78頁
2011・06	みちを切り拓くコミュニティの力	7論文収録[広井良典氏、巽和夫氏、村井忠政氏、檜谷恵美子氏、森反章氏他]	A4版 68頁
2010・07	地域経営	8論文収録[平松守彦氏、望月照彦氏、西尾正範氏、鈴木豊氏他]	A4版 94頁
2009・11	大都市遠郊外住宅地のエリアマネジメント	1会議録7論文収録[小林重敬氏、中城康彦氏、梅田勝也氏、佐竹五六氏他]	A4版 94頁
2009・03	ネットワーク社会の将来	1対談8論文収録[石井威望氏×戸沼幸市、斉藤諱淳氏、澤登信子氏、藤井敏信氏他]	A4版 96頁
2008・07	グローカル時代の地域戦略	1対談8論文収録[下河辺淳氏×戸沼幸市、大村虔一氏、石井喜三郎氏、今野修平氏他]	A4版 88頁
2008・01	諸外国の国土政策・都市政策	9論文収録[城所哲夫氏、片山健介氏、村上顕人氏、大木健一氏他]	A4版 86頁
2007・07	大学改革と都市・地域の再構築	10論文収録[天野郁夫氏、福井有氏、牧野暢男氏他]	A4版 88頁
2007・01	人口減少社会の研究—人口減少社会の将来像、国のかたち、地域のかたち	10論文収録[正岡寛司氏、坂田期雄氏、天野郁夫氏、今野修平氏他]	A4版 74頁

※2008・01号「諸外国の国土政策・都市政策」、2011・06号「みちを切り拓くコミュニティの力」を除き、若干の余部がございます。ご希望の方は、一般財団法人日本開発構想研究所総務室までご連絡下さい。



2016 [平成 28] 年 6 月発行

編集・発行

一般財団法人日本開発構想研究所 「下河辺淳アーカイヴス」

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-16-4 アーバン虎ノ門ビル 7F

電話 (03)3504-1760 ファクシミリ (03)3504-0752

e-mail : shimokobe-arch@ued.or.jp URL : <http://www.ued.or.jp/>